

地方自治体のウェルビーイング政策推進に関する研究

－ウェルビーイング指標の開発および横展開可能な

公共政策パッケージのデザイン－

研究報告書

研究代表者	宮田 裕章	研究主幹
研究分担者	石川 善樹	主席研究員
	立森 久照	主席研究員
	高野 翔	研究員
	村上 (内堀) 愛恵	研究員
	金森 由晃	研究員
リサーチアシスタント	東野 瑠華	慶應義塾大学 医学部 医療政策・管理学教室 研究員
研究協力者	芝 孝一郎	ボストン大学 公衆衛生大学院 助教

目次

Executive Summary	5
はじめに	7
第一章 課題設定	7
第二章 地方自治体の政策パッケージ	9
1. ウェルビーイング政策における主観的ウェルビーイングの3つの役割	9
2. ウェルビーイングを起点にした政策デザインの在り方	10
3. ウェルビーイング政策の実践を支えるシンプルなロジックモデル	12
第三章 ウェルビーイング指標の比較：健幸量の提案	13
1. 議論に資する指標の必須条件	13
2. 「健幸量」という指標の提案	16
1) 各指標との関連から見る「健幸量」の特徴	16
2) 対象と方法	20
3) 結果	20
3. ウェルビーイング指標の比較検討を通じた考察	28
第四章 国内におけるウェルビーイング関連調査	32
1. 北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査	32
1) 北陸地方のウェルビーイングの全体像	32
2) 思春期のウェルビーイング	33
3) 本調査の実施結果から得られる示唆	35
2. 福井ウェルビーイング政策調査	36
1) 主観的ウェルビーイングの全体像	36
2) 孤独・孤立とウェルビーイングの関連	37
3) 各政策分野の KPI と主観的ウェルビーイング	39
3. 二つの調査結果を踏まえた考察	43
第五章 都道府県ウェルビーイング政策実態調査・ウェビナーの開催	44
1. 都道府県ウェルビーイング政策実態調査	44
2. ウェビナー「都道府県で共創する未来 ～ウェルビーイング政策に関する優良事例の共有と連携強化～」	47
1) 都道府県がウェルビーイングを旗印として掲げることによる効果	47
2) 都道府県ウェルビーイング政策における課題	47
3) 都道府県ウェルビーイング政策における課題の解決策	49
4) ウェビナーおよび意見交換会における議論のまとめ・考察	52
第六章 総括	53

Executive Summary

2021 年は、わが国において「ウェルビーイング (well-being) 元年」とも言える年になった。具体的には、2021 年 6 月に公表された政府の骨太方針において、「政府の各種の基本計画等についてウェルビーイングに関する KPI を設定すること」が明記された。それを受けて、すでに管轄する 32 の基本計画においてウェルビーイングに関する KPI が設定され、2023 年には文部科学省の教育振興基本計画など新たに 3 つの基本計画での設定がされるなど、中央省庁の公共政策分野においてはウェルビーイングという考え方が浸透し始めている。一方で、地方自治体における進展は、2023 年の骨太方針で「地方自治体における Well-being 指標の活用を促進する」との記述が盛り込まれた段階で、まさにこれから本格化していくというフェーズにある。

そのような課題意識を背景に、本研究プログラムでは、地方自治体におけるウェルビーイング政策の推進に焦点を当て、ウェルビーイング政策推進に資する指標開発や調査、政策パッケージの開発を行った。以下では、本研究プログラムのサマリーとして、地方自治体のウェルビーイング政策担当者の生の声、本研究プログラムで実施した調査から得られた結果、それらを踏まえて本研究プログラムで提案するウェルビーイング政策パッケージを整理する。

1. 地方自治体からの声

本研究プログラムでは、ウェルビーイング政策に積極的に取り組んでいる地方自治体の担当者を集めたイベントを開催した。イベント内で担当者から出てきた意見では、主観的ウェルビーイングを変動指標として設定することやロジックモデルとして構築することの困難さなどが表出され、ウェルビーイング指標をどのような政策フレームワークの考え方にに基づき活用することがウェルビーイング政策の推進につながるかについて、課題があることが改めて浮き彫りとなった。同時に、地方自治体においても積極的にウェルビーイング政策の展開を目指している例が多くあり、ウェルビーイング分野における政策研究を進めることの重要性が明らかになったほか、本研究プログラムの成果物にもつながる、地方自治体でのウェルビーイング政策のロジックモデルの手がかりを得ることができた。（イベントに関する詳細は第五章 2. を参照）

2. 定量的な調査から得られた結果

本研究プログラムでは、これまで国際的に用いられてきたウェルビーイング測定指標を比較分析し新たな指標「健幸量」を提案するとともに、国内でのウェルビーイング政策に資する調査を行った。具体的には、性や年齢などの人口統計学的特性ごとのウェルビーイングの算出や大人と学生世代を分けた分析などにより、介入や支援が必要な属性など自治体での検討に資するデータを得た。また、地方自治体において KPI と設定しうる指標と主観的ウェルビーイングの関連を明らかにし、ウェルビーイング政策のフレームワークの理論的根拠となりうることを確認した。本調査で調査した各分野における指標と主観的ウェルビーイングの間には関連が見られたことから、主観的ウェルビーイングにつながる KPI を各政策分野において設定することが、ウェルビーイング政策推進の手がかりとなることが示唆された。（詳細は第四章を参照）

3. 地方自治体におけるウェルビーイング政策パッケージの提案

地方自治体の担当者からは、どのような政策フレームワークの考え方でウェルビーイング指標を活用することがウェルビーイング政策の推進につながるかに課題感があることや、調査において自治

体政策の中で KPI に設定しうる指標と主観的ウェルビーイングの関連が明らかになった。これらを受けて、本研究プログラムでは、総合的な主観的ウェルビーイングを、地方自治体が政策の効果検証に用いる KPI となるアウトカムレベルではなく、インパクトレベルに位置付けることを提案する。地域のウェルビーイングをあくまで最終インパクトに据え、特定政策分野ごとの効果検証対象となるアウトカムの KPI 達成を目指し、インプットとアウトプットを各自治体が地域の実情にあわせて試行錯誤することができるロジックモデルのデザインとした。このロジックモデルの考え方が、今後の、各地方自治体に合わせて横展開可能なウェルビーイング政策推進をする上で一つの起点となるだろう。（詳細は第二章を参照）

はじめに

この研究報告書は、ウェルビーイングに関心のある読者に広く役立つものとなることを念頭におきつつも、主たる読者としては自治体においてウェルビーイング政策に関わる担当者および政策立案者に資するものとなることを想定して作成した。

第一章では、本研究プログラムの実施および本報告書作成にあたり、地方自治体でのウェルビーイング政策の現状に関する課題を記載した。第二章以降の各章を読む上での横串となる課題感である。第二章では、本研究プログラムの成果の一つであるウェルビーイング政策のフレームワークについて、その考え方を記載した。第三章では、ウェルビーイングをめぐるグローバルな観点も視野に入れながら、日本から世界に発信し、かつ地方自治体でも活用しうる指標について提案を行った。提案する指標が実際に社会実装されていくためには、現在国で進められている「幸齢社会」等の各種政策との整合性をとりながら進めていく必要がある、引き続き関係各所と建設的な対話を行っていく予定である。読者におかれては、これまでに国際的にも広く測定されてきたウェルビーイング指標の潮流など、今後ウェルビーイング政策を推進するにあたっての基礎的な指標の考え方をつかんでいただきたい。第四章では、ウェルビーイング政策のフレームワークを理論的に補強する調査結果について報告した。第五章では、国内におけるウェルビーイング政策の実態調査の結果を報告するとともに、積極的にウェルビーイング政策を推進している自治体の担当を集めたイベントで得られた成果をまとめた。

第一章 課題設定

2021年6月に公表された政府の骨太方針において、「政府の各種の基本計画等についてウェルビーイングに関するKPIを設定すること」が明記された。それを受けて、すでに管轄する32の基本計画においてウェルビーイングに関するKPIが設定され、2023年には文部科学省の教育振興基本計画など新たに3つの基本計画での設定がされるなど、中央省庁の公共政策分野においてはウェルビーイングという考え方が浸透し始めている。一方で、地方自治体における進展は、2023年の骨太方針で「地方自治体におけるWell-being指標の活用を促進する」との記述が盛り込まれた段階で、まさにこれから本格化していくというフェーズにある。

同時に、グローバルな観点から見ても、ウェルビーイングを測定する指標は多種多様であり、簡便かつ現在から将来にわたるウェルビーイングを評価できる一貫した指標の普及はまだ進んでいないと言える。

そのような状況を踏まえると、日本の地方自治体においてウェルビーイング指標をどのような政策フレームワークの考え方に基づき活用することがウェルビーイング政策の推進につながるかについて、多くの課題があることが予想される。多くの課題の中の一つとして、さまざまな政策分野をどのようにウェルビーイングと体系立てて整理するか、そもそも政策分野におけるKPIと主観的ウェルビーイングがどのような関係にあるのかが明確になっていないことが予想される。

地方自治体におけるウェルビーイング政策を推進していくためには、①各政策分野においてKPIとなりうる指標とウェルビーイングとの関係を定量化し、より具体的で効果的な政策策定のためのエビデンスを作り出し、②ウェルビーイングを主軸として各政策分野を位置付けるロジックモデルのあり方を整理する必要があると考える。

本研究プログラムでは、まずはウェルビーイング政策を「住民のウェルビーイングの増進を目指し、望まない孤独・孤立を予防し、多様なつながりを育める生活を支える政策」と捉え、地方自治体のウェルビーイング政策推進に関する調査研究を行った。

第二章 地方自治体の政策パッケージ

1. ウェルビーイング政策における主観的ウェルビーイングの3つの役割

本研究プログラムでは、ウェルビーイング政策を「住民のウェルビーイングの増進を目指し、望まない孤独・孤立を予防し、多様なつながりを育める生活を支える政策」と捉え、地方自治体のウェルビーイング政策推進に関する調査研究を行う。

ウェルビーイング政策における主観的ウェルビーイング（Subjective Well-being）に期待される役割・機能は、以下の3つに整理することができると思う。

1つ目は、地域社会における将来ビジョンの提示機能。2つ目は、指標設定を通じた地域のウェルビーイングの測定把握機能。3つ目は、ウェルビーイングを起点にした政策デザイン機能、である。

1つ目および2つ目の地域のビジョン提示および地域の豊かさ・進歩や健全度の測定把握については、ウェルビーイングを起点にした公共政策の源流であるブータン王国にはじまり、フランスでは2009年に、コロンビア大学のジョセフ・スティグリッツ教授を委員長、ハーバード大学のアマルティア・セン教授を首席アドバイザーとした「経済成果と社会進歩の計測に関する委員会」、2012年には、国連の持続可能開発ソリューションネットワークが、世界の人々の主観的ウェルビーイングを測定する世界的調査として「世界幸福度報告」(World Happiness Report)の発刊をはじめするなど、経済合理性だけでは測ることのできない豊かさや幸せの実感などを重要視する社会的進歩を、主観的ウェルビーイングを中核に据えながら目指していく必要性が広く国際社会において認識されるようになった。

また、日本国内においても、「経済財政運営と改革の基本方針 2021(骨太の方針 2021)」において、ウェルビーイングを政府の各種の基本計画等のKPIに設定することが決定された。「デジタル田園都市国家構想」においては、ウェルビーイングを一つの将来ビジョンと位置付け、各自治体による地域のウェルビーイングの測定把握を推進する設計となった。加えて、「経済財政運営と改革の基本方針 2023(骨太の方針 2023)」においては、より踏み込んだ形となり、効果的・効率的な支出の推進とEBPM（Evidence-Based Policy Making: 証拠に基づく政策立案）の徹底強化に向けて、「地方自治体における Well-being 指標の活用を促進する」と記載された。このような背景を基に、日本全国の自治体において、ウェルビーイングを活用した地域の社会ビジョン提示やウェルビーイング指標を基にした地域の豊かさの測定把握・可視化が進んでいる。

2. ウェルビーイングを起点にした政策デザインの在り方

一方で、主観的ウェルビーイングの3つ目の役割・機能として期待される「ウェルビーイングを起点にした政策デザイン機能」は発展途上であると考え。主観的ウェルビーイングを政策フレームワークにおいてどのような位置付けで活用すべきかなど、現在、さまざまな自治体でビジョン提示および測定把握を越えて、主観的ウェルビーイングを活用した政策デザインの在り方を議論するフェーズにある。については、本研究プログラムでは、主観的ウェルビーイングの特徴を正確に捉え、ウェルビーイングを起点にした政策デザインの在り方を提案・共有することが、自治体のウェルビーイング政策推進において価値があると考え。

ウェルビーイングを起点にした政策デザインを考える上で2つのポイントがある。1つ目は、各地域の目指すウェルビーイングは多様であり、全国画一的なウェルビーイング指標は設けないことである。各地域の地理的条件や生活文化は土地にひも付いて多様であり、よい状態を意味するウェルビーイングも地域ごとにその特徴は異なる。そのため、政策デザインとして、各自治体が地域資源を活用し、おのおの方法にてウェルビーイングを目指すことができる政策フレームワークが重要であると考え、全国一律かつ全ての政策分野をカバーする網羅的なウェルビーイング指標は設定しないアプローチをとる。

2つ目は、主観的ウェルビーイングの特徴・性質を正確に捉え、各自治体が地域の実情に合わせて活用することのできるシンプルなロジックモデルが必要となることである。自治体ごとに地域社会の目指すウェルビーイング像は異なり、またそれを実現するための方法も異なるが、主観的ウェルビーイングを活用するシンプルなロジックモデルは、全ての自治体に共通してデザインすることが可能であり、具体的な政策展開に向けて重要であると考え。

ウェルビーイング政策に取り組むことになった自治体担当者が、一から主観的ウェルビーイングの特徴・性質を学び、正確に理解することができるには時間を要する。例えば、総合的な主観的ウェルビーイングの測定は、「キャントリルはしご」と呼ばれる尺度が世界で広く活用されている。具体的には、「0から10までの番号が振られている階段があり、階段の一番上(10)は、あなたにとって理想の人生を、一番下(0)は、考えられる最悪の人生を表していると仮定した場合、はしごの何段目に立っているか。」という設問を、各個人が0から10までの11段階で自己評価する形式となっている。また、日本の「デジタル田園都市国家構想」の地域幸福度(Well-Being)指標においては、総合的な主観的ウェルビーイングの測定は、「現在、あなたはどの程度幸せですか。『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけお答えください。」という設問になっている。両方とも、数字が高い方がウェルビーイング度が高いと見なし、各地域のウェルビーイング度を人々のウェルビーイング度の平均値を基に可視化することができる。

政策デザインの観点からは、この総合的な主観的ウェルビーイングの平均値の数字を、ある政策を実施することで向上させられるかどうか、と短絡的に考えがちである。しかしながら、人々のウェルビーイングは複合的であり、一つの政策の実施による総合的な主観的ウェルビーイングへの寄与度は限定的であると言わざるをえず、総合的な主観的ウェルビーイングを自治体政策の効果検証対象のアウトカム・KPIに据えるのは適切ではない。

上記は一つの例に過ぎないが、各自治体担当者が、主観的ウェルビーイングの特徴・性質を一から学び、加えて、適切かつ効果的な政策フレームワークを自治体ごとに一から構築していくことは容易ではない。

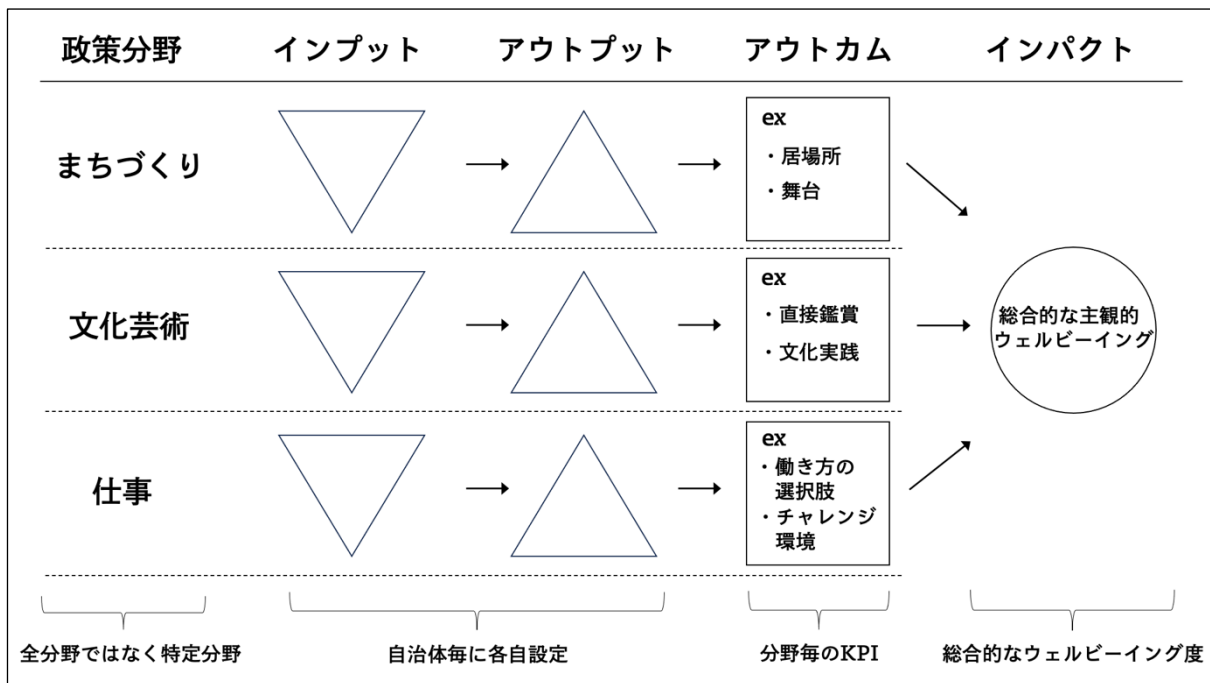
については、地域の多様なウェルビーイングを志向し、地域事情に合わせて各自治体担当者が活用することのできるウェルビーイング政策に共通するシンプルなロジックモデルを提示・共有することが、地方自治体のウェルビーイング政策推進に貢献するものと考え。

3. ウェルビーイング政策の実践を支えるシンプルなロジックモデル

主観的ウェルビーイングを活用したロジックモデルとして、図表1のように、総合的な主観的ウェルビーイングを、地方自治体が政策の効果検証に用いる KPI となるアウトカムレベルではなく、インパクトレベルに位置付けることを提案する。また、アウトカムは、はじめから全分野を網羅的に対象とすることはせずに特定分野に絞り、まちづくり、文化芸術、仕事などの各政策分野において、主観的ウェルビーイングに寄与する KPI を設定する考え方とする。例えば、まちづくり分野においては、地域にほっとできる居場所や自己表現や活躍ができる舞台を持てている方ほど、主観的ウェルビーイングが高いことが先行研究の結果から分かっており、居場所と舞台を KPI とすることができる。加えて、インプットとアウトプットは政策分野ごとのアウトカムを目指し、各自治体が地域ごとの特性を生かして各自で設定する設計とする。

これにより、地域のウェルビーイングを最終インパクトに据え、特定政策分野ごとの効果検証対象となるアウトカムの KPI 達成を目指し、インプットとアウトプットを各自治体が地域の実情にあわせて試行錯誤することができるロジックモデルのデザインとなったものとする。このロジックモデルがウェルビーイング政策の政策デザインの核となり、地方自治体のウェルビーイング政策推進の一つの起点となることを期待する。

図表1 本研究プログラムで提案するウェルビーイング政策のロジックモデル



第三章 ウェルビーイング指標の比較：健幸量の提案

ウェルビーイングを取り巻く国際社会の状況は今まさに重要な地点に立っている。国連のグテーレス事務総長は、「将来のサミット（Summit of the Future）」と題したハイレベル会議を2024年9月22-23日に開催すると発表した。私たちが未来社会を構想する上でこれまで議論されてこなかった、あるいは見落とししてきたテーマについて、さまざまな組織・団体が集まって議論が行われる予定である。この「将来のサミット」は2030年以降の「ポストSDGs」、すなわち次なる国際アジェンダのセッティングを見据えた際に重要な契機となる可能性が高い。特にわが国は、「SDGs and beyond」を基本コンセプトに置いた大阪・関西万博を2025年に開催することから¹⁾、未来社会に対してどのようなアジェンダを投げかけリードすることができるか、国際社会の一員として責任ある立場といえよう。

この章では、これまでの国際社会の動きにも触れながら、ウェルビーイング指標に必要とされる条件を整理し(1.)、本研究プログラムで開発した指標についてその有用性や分析結果について考察(2.)する。

1. 議論に資する指標の必須条件

上述のように、さまざまな思惑や価値観が交錯する国際舞台において、特定アジェンダに関する議論を方向付けるためには、根拠となるデータが必要となる。しかし、一体どのようなテーマ/データを、2024年の国連「将来のサミット」や2025年の「大阪・関西万博」において日本は披歴できるのだろうか。本研究プログラムでは、以下に掲げる3つの条件を満たす必要があると考えている。

【条件1】これまで国際社会が大事にしてきたテーマ/データを補完するものであること

ウェルビーイングに関連するテーマで、国の豊かさや発展をはかる物差しとして国際社会の中で広くコンセンサスがとられている指標は3つある。Gross Domestic Product（GDP: 国内総生産）、Human Development Index（HDI: 人間開発指数）、そして Sustainable Development Goals（SDGs: 持続可能な開発目標）である。それぞれの指標は、固有の特徴と限界を抱えているものの、これら指標を俯瞰してみると、いずれも外部から観察可能な客観的データでほぼ構成されており、対象者本人しか知りえない主観的データが組み込まれていないことがわかる。客観的データのみを使うことのメリットもある一方、それだけでは国民が実際にどのように日々の生活や将来について感じているのという実情をうまく反映できない可能性もある。

しかし、過去半世紀におけるさまざまな調査・研究の結果、主観的ウェルビーイングの重要性が明らかになり²⁾、政策分野において近年注目を集めるようになってきている³⁾。例えば、近年のイギリスや日本では、GDPを補完する形で主観的ウェルビーイングも指標として組み入れた「GDW（Gross Domestic Well-being: 国内総充実）」が提唱され始めている⁴⁾。さらには、地球環境が主体となる「サステナビリティ」と、人間・社会が主体として想起される「ウェルビーイング」を融合した「Sustainable Well-being」というテーマがアカデミア⁵⁾やサステナビリティ団体⁶⁾からも提唱され始めており、いずれSDGsはSWG（Sustainable Well-being Goals: 人間・社会・地球の持続的なウェルビーイング）へと進化していくことが予期される。

【条件2】多くの国で継続的に測定されてきているデータであること

どれだけ重要なテーマだとしても、データがないことには議論の俎上に乗りにくく、また政策のPDCAサイクルにも組み込まれない。ゆえに、多くの国で継続的に測定されてきているデータであることは、重要な必須条件である。

そのような観点で見ると、主観的ウェルビーイングは、2006年より世界150ヶ国以上で毎年測定が行われている¹⁷⁾。そのデータを活用し、2011年より国連の持続可能ソリューションネットワークが、「世界幸福度報告 (World Happiness Report: WHR)」¹⁸⁾として毎年各国の主観的ウェルビーイング度について発表してきている。あるいは同データを活用して、OECDは加盟国のウェルビーイング度を示す Better Life Index¹⁹⁾を構成している。

【条件3】日本から国際社会に提案することに価値あるテーマであること

3つ目の条件として、このテーマを日本から国際社会に提示することの価値について触れたい。

主観的ウェルビーイングによる幸福感には文化差があることが知られている。例えば、北米の幸福感は、個人の能力の発現による個人達成志向の傾向があるのに対し、日本では他者との関係性を重んじる関係志向の傾向があるとされる^[10]。また、2022年3月の世界幸福度報告においては、主観的ウェルビーイングを測定する指標の一つとして、生活の調和とバランス（Balance and Harmony）が用いられるなど^[11]、日本の和を重んじる協調的なウェルビーイング観は、異文化間の対話に基づく平和が切に求められる今日の国際社会において役割があるものと考えられる。

また、日本の国際社会への貢献として日本が各国に実施してきた国際協力は「人間の安全保障」という理念を中心に据えてきた。「人間の安全保障」は、元国連難民高等弁務官および元 JICA 理事長の緒方貞子氏とノーベル経済学賞受賞者のアマルティア・セン氏を共同議長とする人間の安全保障委員会にて提唱された理念・協力指針であり、人々の内的な尊厳と可能性を守り、そしてエンパワーメントするという、一人ひとりがよりよく生きられるため（ウェルビーイング）に、日本が人々に寄り添った国際協力を重要視してきた歴史を示すものでもある。

加えて、国内政策の観点からは、日本は2021年度より政府のいわゆる骨太方針・成長戦略に「主観的ウェルビーイング」が明確に位置付けられた。それに伴い各府省庁は、基本計画等の作成の際は必ずウェルビーイングに関する KPI を策定することが求められており、すでに実装が進んでいる。以上の観点から日本は、世界においてウェルビーイング政策をリードする国の一つとなっている。

特に、日本は、主観的ウェルビーイングを支える健康という指標において、平均寿命が戦後復興を経て世界のトップとなった国であり、かつ昨今では人々の健康を害することが知られている孤独・孤立における課題先進国でもある。健康分野における日本のこれまでの経験や知見、そしてこれからのウェルビーイングを志向する対策は世界から注目を集める存在であると言える。また、2023年に制定された認知症基本法に基づき、「幸齢社会の実現」を目指して会議体の組成や各種政策への落とし込みが拡充・加速化している。

上記、3つの条件をウェルビーイングというテーマに即して考えるならば、「主観的ウェルビーイング」は、これまで国際社会が大事にしてきた GDP/HDI/SDGs 等を補完しうるテーマ/データであり（条件1）、すでにグローバル規模で測定が行われてきており（条件2）、日本から発信することが国際社会にとって価値あるもの（条件3）であると言える。

2. 「健幸量」という指標の提案

この節では、1.で整理した指標の条件を踏まえて、日本から国際社会に対して具体的にどのようなデータを示しうるかについて考察する。

国連の World Happiness Report で示されているように、主観的ウェルビーイングを何らかの方法で新たに定義・提示していくというのは一つの方向性である。しかし、そのような新指標は、既存指標との関連性などを考慮した際に、すぐには受け入れられにくい可能性が高い。

本研究プログラムでは、新しい指標を提案するのではなく、SDGs や HDI などの既存指標に主観的ウェルビーイングを組み込んでアップデートするというやり方を考案した。たとえば HDI は、健康・教育・収入という3側面から国の豊かさを示すものであるが、健康は「平均寿命」のデータが使われており、主観的ウェルビーイングの観点が入っていない。平均寿命が高い国なら主観的ウェルビーイングもよいとは限らない。あるいは、SDGs の目標3は「Good health and well-being」となっているが、含まれる指標は疾患の罹患率や死亡率など「ill-being」に関するものばかりで、目標3が掲げる「Good health and well-being」な指標は皆無である（その理由として目標3はミレニアム開発目標の流れを受けて策定されたためである）^[12]。ill-being がなかったとしても必ずしも（主観的な）well-being がよいとは限らない。実際、コロンビア大学教授でSDGsの策定にも関わってきたジェフリー・サックス氏は、「目標3に足りていない観点として主観的ウェルビーイングがある」と指摘している^[13]。

本研究プログラムで提案する指標は、まずは健康にターゲットを絞り、「Good Health and Well-being」に関する統合指標の作成の足がかりとなるようなデータを提供することを目的とし、将来的にはGDWやHDI、あるいはSDGsなどの既存指標に組み込まれることを期待できる指標と言える。

1) 各指標との関連から見る「健幸量」の特徴

上述の通り、本研究プログラムでは、「Good health and well-being」の新しい統合指標を提示し、グローバルレベルでの比較分析を通じた結果からその可能性と今後の課題を明らかにした。

幸せに長く生きられることを社会的アウトプットとして捉え、Erasmus University Rotterdam のルウト・ヴィーンホーフエン氏は、平均余命（年）と平均幸福度（0-1）を掛け合わせた Happy Life-Expectancy と呼ばれる考え方を1996年に提唱^[14]した。また、LSE（London School of Economics）の名誉教授であるリチャード・レイヤード氏は生涯ウェルビーイング量とも言える「WELLBY」というアプローチを、国連が世界140カ国以上を対象にウェルビーイングを測定し公表する「世界幸福度報告2021」（World Happiness Report 2021）にて発表している^[15]。

WELLBY は、主観的ウェルビーイング度に平均寿命を掛けることにより算出される指標であり（「現在の主観的ウェルビーイング度」×「平均寿命」）、人々が主観的ウェルビーイングを実感しながら健康に生きられる時間の長さ、すなわち“生涯ウェルビーイング量”を算出することを目指している。

この主観的ウェルビーイングを測る方法として、WELLBYにおいて採用しているのは、ハドレー・キャントリル氏が1965年に開発した「キャントリルはしご」と呼ばれる測定方法である^[16]。具体的には「0から10までの番号が振られているはしごがあり、階段の一番上（10）はあなたにとって理想の人生を、一番下（0）は、考えられる最悪の人生を表していると仮定した場合、はしごの何段目に立っているか」を各個人が自己評価する設問形式となっている。0から10までの11段階での評価があり、数字が高いほどウェルビーイング度が高いと見なす。

上記の生涯ウェルビーイング量としてのWELLBYは、SDGsにゴールとして明記されている「Good health and well-being」の統合指標として、今後の活用が期待されるものであるが、同時に改善ポイントも考えられる。それは、WELLBYの測定において、主観的ウェルビーイングは時間軸における現在のみを対象としており、将来の観点が入っていないことである。人の主観的ウェルビーイングを測定

する際には、現在の良い状態ばかりでなく、今後の生活が良くなる兆しがあるのか、より良い社会への希望をもてるかなど、未来へのまなざしも同様に大事である。

そこで、上記のキャントリルはしごを用いて、「①現在、はしごの何段目に立っているか」という現在の主観的ウェルビーイング度とともに、「②5年後には、はしごの何段目に立っているか」の設問を加え、現在と未来の主観的ウェルビーイング度を捉えることが改善点として考えられる。なお、未来という地点の取り方として、上述のハドレー・キャントリル氏がウェルビーイングに関する国際調査をまとめた『*The Pattern of Human Concerns*』（1965年）にて、「5年後」と設定し調査を行ったのがはじまりとされ、それ以降、国際調査において、5年後という捉え方がスタンダードとなっている[16]。

米国の調査会社ギャラップの世論調査（Gallup World Poll）では、①の現在が7段目以上かつ②の将来が8段目以上の人々を「ウェルビーイング実感が高い（Thriving）」と定義し、測定を続けてきている^[17]。現在と将来の主観的ウェルビーイング度の平均をとるアプローチでは、各ウェルビーイング度が同程度に重要であるという仮定のもと総合的なウェルビーイング度を評価することになる。一方、Thriving を用いたアプローチでは未来の主観的ウェルビーイング度に対するカットオフ値を高く設定することで、現在よりも未来に対する主観的ウェルビーイング度により重きを置いた評価をしている。国の GDP が堅調または横ばいに推移していたとしても、この「ウェルビーイング実感が高い（Thriving）」人々の割合が大きく低下した後、社会混乱が生じた国の実例も報告されている。GDP などの経済指標からはくみ取ることができない人々の質的状況や社会に流れる「主観的情報」を、現在と将来の主観的ウェルビーイングの測定結果は捉えているという可能性を示唆するものである^[18]。一人ひとりの主観的ウェルビーイング度の数字を向上させるという視点だけでなく、「ウェルビーイング実感が高い（Thriving）」人々の割合を社会として観察し、大きくしていこうとするアプローチも有益であると考えられる。

また寿命を評価する方法としては、0歳における平均余命を表す「平均寿命」ではなく、日常生活に制限のない期間の平均を表す「健康寿命」がより重要視されるようになってきている。しかし、WELLBY では健康寿命ではなく平均寿命が計算に用いられている。

そこで「Good health and well-being」の新しい統合指標として、現在と将来の主観的ウェルビーイングから求められる「ウェルビーイング実感が高い（Thriving）人々の割合」と「健康寿命」を掛けることにより算出される数値を、ウェルビーイングを実感できるのち輝く時間の長さとしての“健幸量”と捉えることを本研究プログラムでは試みた。

また補足であるが、これからわが国において、健幸量が幸齢社会の実現度をはかる指標の一つとなるならば、健幸量の要因について明らかとすることは有用であろう。その際に、健幸量を構成する2要因のうち、特に健康寿命についてはその要因は広く知られているので、本報告書では日本における Thriving の要因について分析した結果を、影響力の高い順に下記図表2に示した。なお、この要因分析に関する詳細は、補足資料1に記した。

図表2 Thriving の要因（現在の生活満足度と5年後の生活満足度の予測因子）

	現在の生活満足度の予測因子	5年後の生活満足度の予測因子
1	世帯収入への主観的認識	世帯収入への主観的認識
2	人生で何をするかについての選択の自由	人生で何をするかについての選択の自由
3	食事に困らないお金を持っていること	年齢
4	世帯構成	助けを求められる人がいること
5	助けを求められる人がいること	都市性
6	健康問題	世帯構成
7	教育水準	教育水準
8	婚姻状況	健康問題
9	都市性	食事に困らないお金を持っていること

10	性別	雇用狀況
11	雇用狀況	性別
12	客觀的收入	婚姻狀況
13	年齡	客觀的收入

2) 対象と方法

a. データ

本研究ではギャラップ社が実施する国際世論調査 Gallup World Poll (GWP)のデータを使用した。GWPは世界 168 カ国において、15 歳以上の地域在住国民の代表サンプルを抽出しており、これは世界人口の 98%以上を網羅している。GWP は 2006 年から調査を開始し、2019 年まで毎年 1 カ国あたり 1000 名程度に対する横断調査を繰り返している。低所得国では対面のインタビュー調査を行った。GWP は世帯クラスターを一次抽出単位として選択し、その後クラスター内の世帯、そして各世帯内の構成員を標本抽出するという、多段抽出を行った。国民の 80%以上が電話へのアクセスをもつ高所得国ではランダム・デジタル・ダイアリングを用いて調査を行った。本分析では 14 年間の調査期間中に一度も生活満足度が測定されなかった、または健康寿命のデータがなかった 6 カ国(アゼルバイジャン、キプロス、香港、コソボ、北マケドニア、ソマリア)を除く 162 カ国からとられた、2,126,631 名のデータを使用した。

b. 測定項目

生活満足度は現在の生活に対する満足度と 5 年後の生活に対する満足度の 2 種類が測定された。回答者は「目の前に一番下が 0、一番上が 10 と番号がつけられたハシゴがあると想像してください。0 段目はあなたにとって“最低の生活”、10 段目はあなたにとって“最高の生活”を意味します。あなたは今/今から 5 年後、ハシゴのどの段階にいると思いますか？」という質問に対して、0 から 10 までの数字を報告した。また現在の生活満足度得点が 7 点以上かつ 5 年後の生活満足度得点が 8 点以上の人を特にウェルビーイングが良い“**繁栄状態(Thriving)**”と定義した。

各国年度別の平均寿命の情報は国際連合経済社会局(United Nations Department of Economic and Social Affairs)が提供する人口動態統計データから取得した^[19]。各国年度別の健康寿命の情報は米ワシントン大学の保健指標評価研究所(Institute for Health Metrics and Evaluation: IHME)が公開している Global Health Data Exchange からデータを取得した^[20]。

c. 統計解析

各国の各年における平均寿命、健康寿命、平均生活満足度（現在）、平均生活満足度（5 年後）、**Thriving** 割合に加えて $WELLBY = \text{平均寿命} \times \text{生活満足度（現在）} + \text{健康寿命} \times \text{Thriving 割合}$ を計算した。これらの指標について、次の 4 つの解析を行った。第 1 に、2019 年のデータを用いて各指標に対して世界・アジアのランキングを作成しトップ 10 カ国を比較した。第 2 に、2006 年と 2019 年を比較し、各指標のアジア（および世界）ランキングおよび平均値がどのように変化したかを検討した。第 3 に、各指標において、日本が世界およびアジア諸国で何位に位置しているか、2006 年から 2019 年までの間のランキング推移を可視化した。第 4 に、世界の 11 地域 (Australia-New Zealand, Commonwealth of Independent States, European Union, Europe-Other, Latin America and the Caribbean, Northern America, East Asia, South Asia, Southeast Asia, Middle East and North Africa, Sub-Saharan Africa) ごとの健康寿命、**Thriving** 割合、健康量が 2006 年から 2019 年までどのように変化したかを検討した。

3) 結果

2019 年における各指標の世界・アジア内トップ 10 カ国をそれぞれまとめたものが図表 3 である。平均寿命や健康寿命ではアジア諸国が上位にランクインした。例えば、平均寿命の 1 位は日本(84.4 歳)であった。健康寿命の 1 位はシンガポール(74.5 歳)、そして 2 位日本(73.8 歳)、3 位韓国(72.3 歳)が続いた。一方、現在の生活満足度の上位は北欧諸国（1 位フィンランド、3 位デンマーク、4 位ア

イスラランドなど)が多くランクインしていた。これに対して、5年後の生活満足度のランキングは大きくトレンドが異なっており、ウズベキスタン、ジャマイカ、ブラジルが上位3カ国であった。現在と5年後の生活満足度の両方を考慮した指標である Thriving に注目すると、Thriving 状態にある人の割合が最も高いのはデンマーク(73%)で、フィンランド(71%)、アイスラランド(69%)と続いた。平均寿命と現在の生活満足度を合わせた指標である WELLBY と健康寿命と Thriving 割合を合わせた指標である健幸量は似たようなトレンドであったが、WELLBY ではイスラエル・オーストラリアが上位10カ国に入っているのに対して、健幸量ではUKやアイルランドがトップ10入りしていた。指標によるトレンドの違いはアジア内ランキングに注目するとより顕著であった。現在の生活満足度のアジアトップ3は台湾、シンガポール、フィリピンで日本は5位であった。ところが5年後の生活満足度はモンゴル、インドネシア、カンボジアなど現在の生活満足度が高くなかった国が多く上位にランクインしており、日本はトップ10圏外となっていた。WELLBY と健幸量の傾向を比べると、シンガポール、台湾がトップ2である点は同じだが、現在の生活満足度に注目したWELLBYでは日本が3位だったのに対して、現在と5年後の生活満足度両方を考慮した健幸量では6位にランキングが下がっていた。ベトナムや中国は、WELLBYではアジア上位10カ国に入っている一方、健幸量では両国ともにトップ10圏外となっていた。

図表3 2019年の各ウェルビーイング指標世界・アジアトップ10カ国

世界				生活満足度	生活満足度	Thriving	WELLBY
ランク	健幸量	平均寿命	健康寿命	(現在)	(5年後)		
1	Denmark (51.1)	Japan (84.4)	Singapore (74.5)	Finland (7.78)	Uzbekistan (8.75)	Denmark (0.73)	Switzerland (644.6)
2	Finland (50.1)	Switzerland (83.8)	Japan (73.8)	Switzerland (7.69)	Jamaica (8.57)	Finland (0.71)	Finland (637)
3	Iceland (49.8)	Singapore (83.8)	South Korea (72.3)	Denmark (7.69)	Brazil (8.36)	Iceland (0.69)	Denmark (626.5)
4	Switzerland (49)	South Korea (83.7)	Iceland (72.3)	Iceland (7.53)	Saudi Arabia (8.25)	Switzerland (0.68)	Iceland (620.7)
5	Netherlands (44.6)	Italy (83.6)	Switzerland (72)	Norway (7.44)	United Arab Emirates (8.21)	Netherlands (0.63)	Norway (617.4)
6	Norway (43.9)	Spain (83.5)	Israel (71.8)	Netherlands (7.43)	Kyrgyzstan (8.19)	Norway (0.62)	Sweden (614.4)
7	Sweden (43.5)	Malta (83.2)	Spain (71.6)	Luxembourg (7.4)	Bahrain (8.13)	Sweden (0.61)	Netherlands (609.2)
8	Luxembourg (42)	Australia (83.1)	France (71.5)	Sweden (7.4)	Denmark (8.12)	United Kingdom (0.61)	Luxembourg (608.2)
9	United Kingdom (41.8)	Sweden (83.1)	Sweden (71.4)	Israel (7.33)	Mongolia (8.09)	Luxembourg (0.59)	Israel (607.2)
10	Ireland (41.5)	Norway (83)	Italy (71.2)	Ireland (7.25)	Switzerland (8.03)	Ireland (0.59)	Australia (601.2)
アジア				生活満足度	生活満足度	Thriving	WELLBY
ランク	健幸量	平均寿命	健康寿命	(現在)	(5年後)		
1	Singapore (25.9)	Japan (84.4)	Singapore (74.5)	Taiwan (6.54)	Mongolia (8.09)	Singapore (0.35)	Singapore (534.2)
2	Taiwan (23.1)	Singapore (83.8)	Japan (73.8)	Singapore (6.38)	Indonesia (7.84)	Philippines (0.34)	Taiwan (527.2)
3	Philippines (21.3)	South Korea (83.7)	South Korea (72.3)	Philippines (6.27)	Philippines (7.35)	Taiwan (0.33)	Japan (498.8)
4	South Korea (20.9)	Taiwan (80.7)	Taiwan (70.7)	Thailand (6.02)	Cambodia (7.16)	Thailand (0.3)	South Korea (493.8)
5	Thailand (20.8)	Thailand (79)	China (68.5)	Japan (5.91)	Laos (7.12)	South Korea (0.29)	Thailand (475.6)
6	Japan (18.4)	China (78)	Thailand (68.4)	South Korea (5.9)	Myanmar (7.04)	Indonesia (0.26)	Philippines (450.4)

7	Indonesia (16.1)	Sri Lanka (76)	Sri Lanka (66.9)	Mongolia (5.56)	Singapore (6.98)	Japan (0.25)	Malaysia (411.2)
8	Mongolia (15)	Malaysia (75.8)	Vietnam (65.7)	Vietnam (5.47)	Thailand (6.96)	Mongolia (0.25)	Vietnam (405.1)
9	Malaysia (14.9)	Vietnam (74.1)	Malaysia (65.7)	Nepal (5.45)	Vietnam (6.89)	Nepal (0.24)	China (401.1)
10	Nepal (14.9)	Bangladesh (72.8)	Bangladesh (64.5)	Malaysia (5.43)	Bangladesh (6.88)	Malaysia (0.23)	Mongolia (399.5)

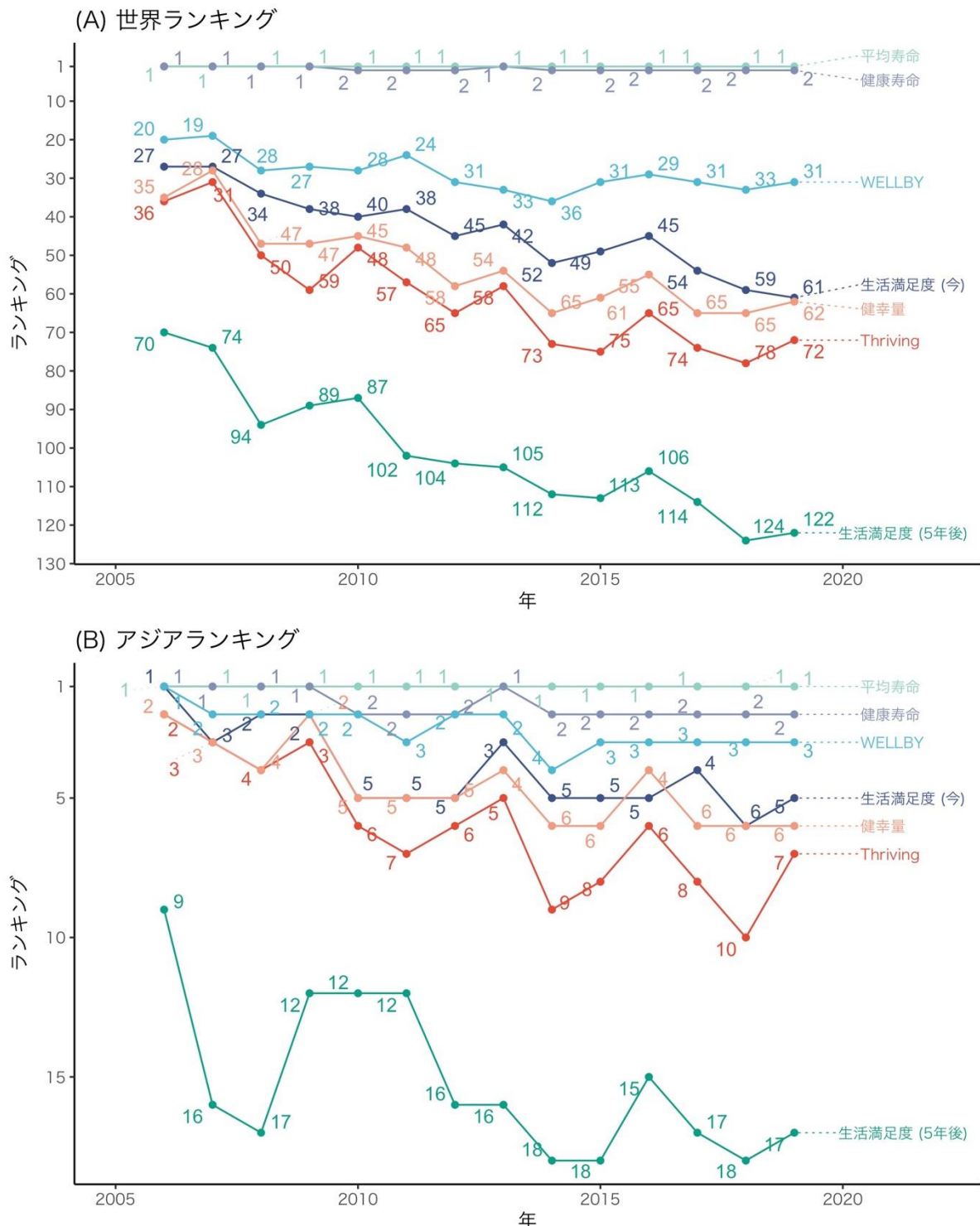
アジアの国々における各指標の値とそのランキングを2006年と2019年で比較しているのが図表4である。健幸量は両時点でシンガポールが1位であったが、13年間の間にランキングが大きく上昇した国（例：台湾5位→2位、フィリピン11位→3位）がある一方、ランキングが下がった国もある（例：日本2位→6位、マレーシア3位→9位、インド8位→19位）。健康寿命のトレンドは2時点で大きく変わっていなかった一方、健幸量ランキングが上昇した国は同期間にThriving状態の人の割合も大きく上昇（例：フィリピン12%→34%）しており、逆に健幸量ランキングが下がった国ではThriving割合も減少していた（例：日本33%→25%）。

図表4 アジアにおける各ウェルビーイング指標の2006年および2019年の比較

2006年							
国名	健幸量	平均寿命	健康寿命	生活満足度	生活満足度	Thriving	WELLBY
				(現在)	(5年後)		
Singapore	25.5 (1)	80.7 (2)	71.8 (2)	6.46 (2)	7.26 (3)	0.35 (1)	521.6 (2)
Japan	23.5 (2)	82.4 (1)	72.2 (1)	6.52 (1)	6.52 (9)	0.33 (2)	536.7 (1)
Malaysia	21.1 (3)	74.2 (7)	65.1 (7)	6.01 (4)	7.46 (1)	0.32 (3)	445.9 (4)
Thailand	18 (4)	74.9 (5)	65.8 (5)	5.89 (5)	7.31 (2)	0.27 (4)	441 (5)
Taiwan	17.3 (5)	77.9 (4)	69.1 (4)	6.19 (3)	6.34 (13)	0.25 (5)	482.3 (3)
South Korea	16.1 (6)	79.1 (3)	69.4 (3)	5.33 (7)	6.35 (12)	0.23 (6)	421.6 (6)
Pakistan	10.9 (7)	63.7 (16)	54.3 (17)	5.22 (9)	6.46 (10)	0.2 (7)	333 (11)
India	10.7 (8)	65.4 (14)	56.1 (15)	5.35 (6)	6.82 (4)	0.19 (8)	349.8 (8)
Vietnam	10.7 (9)	73.3 (8)	64.6 (8)	5.29 (8)	6.64 (7)	0.17 (9)	388.1 (7)
China	7.5 (10)	74.5 (6)	65.4 (6)	4.56 (14)	6.53 (8)	0.12 (11)	339.8 (9)
Philippines	7.1 (11)	70.3 (10)	61.3 (10)	4.67 (12)	5.65 (16)	0.12 (10)	328.2 (12)
Indonesia	5.9 (12)	67.9 (11)	60 (11)	4.95 (11)	6.4 (11)	0.1 (12)	336 (10)
Sri Lanka	5.6 (13)	72 (9)	64.2 (9)	4.34 (15)	6.31 (14)	0.09 (13)	312.7 (13)
Bangladesh	3.6 (14)	67.2 (12)	59 (12)	4.32 (16)	6 (15)	0.06 (14)	290.4 (16)
Nepal	2.9 (15)	65.9 (13)	58.7 (13)	4.57 (13)	6.7 (6)	0.05 (15)	300.8 (15)
Cambodia	1.5 (16)	65.1 (15)	56.5 (14)	3.57 (17)	4.86 (17)	0.03 (16)	232.2 (17)
Laos	1.3 (17)	61.5 (17)	55 (16)	5.08 (10)	6.77 (5)	0.02 (17)	312.2 (14)
2019年							
国名	健幸量	平均寿命	健康寿命	生活満足度	生活満足度	Thriving	WELLBY
				(現在)	(5年後)		
Singapore	25.9 (1)	83.8 (2)	74.5 (1)	6.38 (2)	6.98 (7)	0.35 (1)	534.2 (1)
Taiwan	23.1 (2)	80.7 (4)	70.7 (4)	6.54 (1)	6.74 (11)	0.33 (3)	527.2 (2)
Philippines	21.3 (3)	71.9 (11)	62.7 (11)	6.27 (3)	7.35 (3)	0.34 (2)	450.4 (6)
South Korea	20.9 (4)	83.7 (3)	72.3 (3)	5.9 (6)	6.39 (16)	0.29 (5)	493.8 (4)
Thailand	20.8 (5)	79 (5)	68.4 (6)	6.02 (4)	6.96 (8)	0.3 (4)	475.6 (5)
Japan	18.4 (6)	84.4 (1)	73.8 (2)	5.91 (5)	6.02 (17)	0.25 (7)	498.8 (3)
Indonesia	16.1 (7)	70.5 (15)	62.6 (12)	5.35 (11)	7.84 (2)	0.26 (6)	377 (12)
Mongolia	15 (8)	71.8 (12)	60.4 (18)	5.56 (7)	8.09 (1)	0.25 (8)	399.5 (10)
Malaysia	14.9 (9)	75.8 (8)	65.7 (9)	5.43 (10)	6.58 (13)	0.23 (10)	411.2 (7)
Nepal	14.9 (10)	69.6 (16)	61.5 (13)	5.45 (9)	6.65 (12)	0.24 (9)	379 (11)
Bangladesh	14.2 (11)	72.8 (10)	64.5 (10)	5.11 (14)	6.88 (10)	0.22 (11)	372.3 (13)
Vietnam	13.8 (12)	74.1 (9)	65.7 (8)	5.47 (8)	6.89 (9)	0.21 (12)	405.1 (8)
Cambodia	12.4 (13)	70.7 (14)	61.2 (14)	5 (15)	7.16 (4)	0.2 (13)	353.3 (15)
China	12.1 (14)	78 (6)	68.5 (5)	5.14 (13)	6.4 (14)	0.18 (15)	401.1 (9)
Laos	12 (15)	68.1 (17)	60.7 (16)	5.2 (12)	7.12 (5)	0.2 (14)	354.1 (14)
Myanmar	7.1 (16)	66.6 (19)	60.9 (15)	4.43 (17)	7.04 (6)	0.12 (17)	295.4 (18)
Pakistan	7 (17)	66.8 (18)	57.2 (19)	4.44 (16)	5.01 (18)	0.12 (16)	296.6 (17)
Sri Lanka	6.9 (18)	76 (7)	66.9 (7)	4.21 (18)	6.39 (15)	0.1 (18)	320.2 (16)
India	5.7 (19)	70.9 (13)	60.5 (17)	3.25 (19)	4.96 (19)	0.09 (19)	230.4 (19)
Afghanistan	0.2 (20)	63.6 (20)	54.1 (20)	2.38 (20)	2.48 (20)	0 (20)	151 (20)

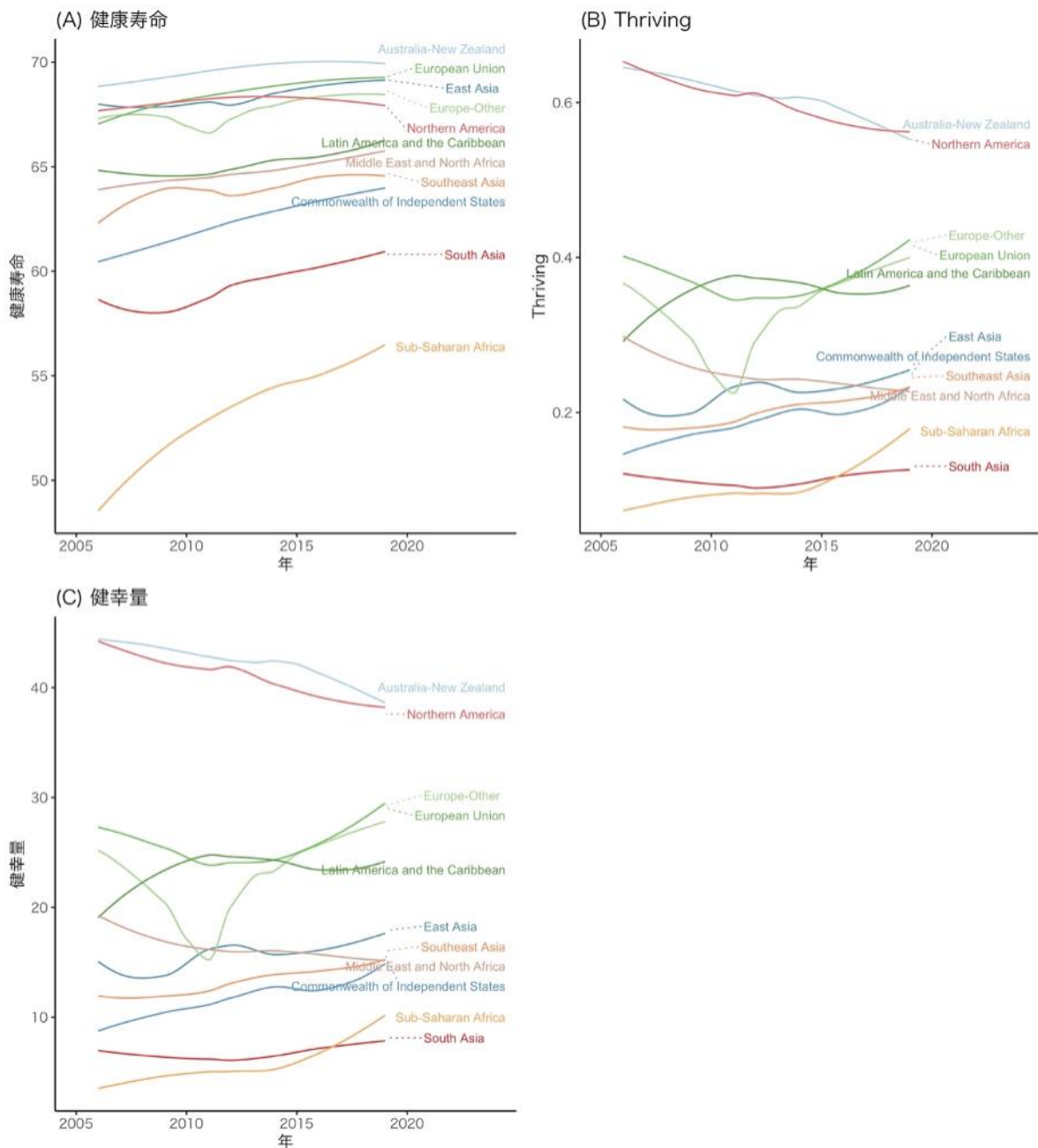
図表5では世界およびアジアにおける日本のランキングの2006年から2019年までの推移を指標ごとに示している。平均寿命・健康寿命はともに14年間変わらずトップ1位または2位を推移していた。一方で、現在の生活満足度と5年後の生活満足度、およびそれらを合わせたThrivng割合はいずれもランキング下降を続けており、特に5年後の生活満足度は他のウェルビーイング指標と比べてランキングが非常に低い状態が続いている。身体的健康状態とウェルビーイングを掛け合わせた指標であるWELLBYと健幸量も、世界およびアジアにおけるランキングが低下し続けており、特に5年後の生活満足度も考慮した健幸量はランキングが大きく下がっている。

図表5 各指標における日本の世界およびアジアランキングの推移(2006-2019年)



図表 6 は(A)健康寿命、(B)Thriving 割合、およびそれら両方を考慮した指標である(C)健幸量について 2006 年から 2019 年までの推移を世界の地域ごとに示したものである。健康寿命 (図表 6(A))は世界のどの地域でも伸びている傾向にあるが、特に元々の健康寿命が短かった Sub-Saharan Africa 地域での伸びが顕著であった。Thriving 割合 (図表 6(B))や健幸量 (図表 6(C))に注目すると、元々これらの指標が高かった Australia-New Zealand や Northern America 地域で 13 年間一貫して低下傾向にあった。一方、Sub-Saharan Africa や SouthEast Asia では上昇しており、South Asia では大きな変化は見られなかった。

図表 6 世界の地域別(A)健康寿命, (B)Thriving, (C)健幸量の推移(2006-2019 年)



3. ウェルビーイング指標の比較検討を通じた考察

この章では、各国の健康・ウェルビーイングを評価するための統合指標作成につながるデータを提供することを目的とし、①客観的データに加えて主観的データ（生活満足度）を組み込む、②平均寿命ではなく健康寿命を使用、③主観的ウェルビーイングに現在の生活に対する満足度だけでなく、未来の生活のウェルビーイングに対する期待度も考慮した **Thriving** 指標を使用するという点で、既存指標（GDP・平均寿命・WELLBY など）との差別化を測った「健幸量」という指標を提案した。

健幸量やその他指標のトレンドを比較すると、2019年時点での国ランキングやランキングの経年変化に違いが見られた。具体的には、平均寿命・健康寿命に注目すると日本は現在も含めて長年にわたって世界トップクラスに位置しているが、主観的ウェルビーイングを取り入れた指標（健幸量およびWELLBY）の場合は大きくランキングが下がることがわかった。特に未来のウェルビーイングを考慮した健幸量に注目すると、現在の生活満足度のみを考慮したWELLBYよりもさらに日本のランキングが下がっていた一方、デンマーク・フィンランドといった国はどちらの指標においても高い順位を維持していた。健康寿命の延伸は世界中で続いているトレンドである一方、北米やオセアニア諸国では**Thriving** 割合および健幸量は低下していることがわかった。このように指標によってトレンドが大きく異なることから、国のパフォーマンスを評価するうえで指標選択の重要性がわかる。

今後の研究において、いくつかの検討点があると考えられる。第1に、主観的ウェルビーイングの指標として何を使うのかという点である。生活満足度は主観的ウェルビーイングを測るシンプルな総合指標として広く使われており、多くの国際的な調査にも含まれていることが大きな強みである。一方で理論的には人間の主観的ウェルビーイングをより細かく細分化することも可能で、例えば「人生の目的(Purpose in life)」の有無や人間関係に対する満足度などは、それら自体が独立したウェルビーイングの指標として捉えられることもある^[21]。ただし、より厳密にウェルビーイングを測定するためには多くの指標が必要となる一方、指標としてのシンプルさとのバランスを考慮する必要がある。多くの主観的ウェルビーイング指標を使う場合、それらを掛け合わせるときの重み付けをどうするか（例：**Thriving** と人生の目的の有無は同じくらい重要なのか、それとも一方の方がよりウェルビーイングにとって重要か）を考える必要があり、また国際比較を行う際に利用可能なデータが少ないなどの問題が生じうる。これらを含めて主観的ウェルビーイングの評価方法を引き続き検討していく必要がある。

第2に、国家間の比較のために主観的ウェルビーイングを統計的に集計する方法についても検討が必要である。本報告では**Thriving** の「割合」を使用したのが、現在・5年後の生活満足度の得点を連続値として使用することも可能であり、その場合は平均を使用するのか中央値を使用するのかなどの検討がされている^[22]。

第3に、平均寿命や健康寿命と主観的ウェルビーイングをどのように合わせるかについても、改善の余地がある。今回検討した健幸量では、健康寿命と**Thriving** 割合という単位の異なる2つの指標を単純に掛け合わせていた。このような指標は計算が簡単である一方、掛け合わせた数字は寿命（年）のような一般的な解釈を持たないという欠点がある。このような弱点を克服する方法として、Sullivan法を用いた生命表に基づくアプローチがある^[23]。これは健康寿命の算出方法を拡張したものだ。2021年にLutzらが生命表を用いた、主観的ウェルビーイングを取り入れた指標(“Years of good life”)の算出方法を提案している^[24]。ウェルビーイングが高い状態でどのくらい長く生きることができるとかを定量化した指標（単位：年）として、平均寿命など従来の指標との比較もしやすく、解釈も容易である。ただしこのYears of good lifeは、ベースとして健康寿命ではなく平均寿命を使っていたり、主観的ウェルビーイングの指標として現在の生活満足度のみ注目していたりなど改善点もあるため、今後のさらなる研究が期待される。

補足資料 1：日本における Thriving の要因分析

Parameter	B (coef)	Std. Error	95% Wald Confidence Interval		Hypothesis Test		Statistical Sig.
			Lower	Upper	Wald Chi-Square	df	Sig.
(Intercept)	5.333	0.2572	4.829	5.837	430.076	1	0
Household Size = DKRF	-1.107	0.4939	-2.075	-0.139	5.024	1	0.025
Household Size = more than 8	3.536	1.7397	0.126	6.946	4.131	1	0.042
Household Size =8	-0.636	1.2348	-3.056	1.784	0.265	1	0.607
Household Size =7	-0.456	0.6647	-1.759	0.847	0.471	1	0.493
Household Size =6	0.534	0.4783	-0.403	1.472	1.247	1	0.264
Household Size =5	0.325	0.2448	-0.155	0.805	1.761	1	0.184
Household Size =4	0.426	0.1606	0.111	0.74	7.025	1	0.008
Household Size =3	0.425	0.1417	0.147	0.703	8.997	1	0.003
Household Size =2	0.278	0.1302	0.023	0.533	4.566	1	0.033
Household Size =1	0a
Age 65+	-0.111	0.1942	-0.492	0.269	0.328	1	0.567
Age 45-64	-0.017	0.1776	-0.365	0.331	0.009	1	0.925
Age 35-44	-0.185	0.1894	-0.556	0.187	0.951	1	0.33
Age 25-34	-0.063	0.1885	-0.433	0.306	0.113	1	0.736
Age 15-24	0a
Urban/Rural= DKRF	1.023	0.5326	-0.021	2.067	3.688	1	0.055
Major City / Suburb	0.242	0.0825	0.081	0.404	8.642	1	0.003
Rural Area / Farm	0a
[Health Problems=3.00] DKRF	-0.674	0.3138	-1.289	-0.059	4.612	1	0.032
[Health Problems=2.00] No	0.304	0.0943	0.119	0.489	10.377	1	0.001
[Health Problems=1.00] Yes	0a
[Count On to Help=3.00] DKRF	0.522	0.5727	-0.601	1.644	0.829	1	0.362
[Count On to Help=2.00] No	-0.541	0.1289	-0.794	-0.289	17.639	1	<.001
[Count On to Help=1.00] Yes	0a
[Not Enough Money: Food=3.00] DKRF	-1.09	0.9689	-2.99	0.809	1.267	1	0.26
[Not Enough Money: Food=2.00] No	0.675	0.1416	0.397	0.952	22.685	1	<.001
[Not Enough Money: Food=1.00] Yes	0a
[Marital Status=8.00] Domestic partner	-0.307	0.5376	-1.36	0.747	0.325	1	0.568
[Marital Status=6.00] DKRF	-0.084	0.4628	-0.991	0.823	0.033	1	0.855
[Marital Status=5.00] Widowed	0.393	0.1784	0.043	0.742	4.847	1	0.028
[Marital Status=4.00] Divorced	-0.119	0.1902	-0.492	0.254	0.393	1	0.531
[Marital Status=3.00] Separated	-0.585	0.4604	-1.488	0.317	1.615	1	0.204
[Marital Status=2.00] Married	0.342	0.138	0.072	0.612	6.146	1	0.013
[Marital Status=1.00] Single	0a
[Gender=2.00] Women	0.271	0.0841	0.106	0.436	10.367	1	0.001
[Gender=1.00] Men	0a
[Employed for Employer=3.00] DKRF	2.537	1.9121	-1.21	6.285	1.761	1	0.184
[Employed for Employer=2.00] No	0.152	0.1001	-0.044	0.349	2.317	1	0.128
[Employed for Employer=1.00] Yes	0a
[Education Level=8.00] DKRF	-0.049	0.4946	-1.018	0.921	0.01	1	0.922
[Education Level=6.00] Graduate level uni	0.361	0.2707	-0.169	0.892	1.78	1	0.182
[Education Level=5.00] College or Uni	0.609	0.1606	0.294	0.924	14.372	1	<.001
[Education Level=4.00] Higher or Junio College	0.48	0.152	0.182	0.778	9.957	1	0.002
[Education Level=3.00] Middle/Senior	0.301	0.1335	0.039	0.563	5.086	1	0.024
[Education Level=2.00] Elementary	0a
[Per Capita Income Quintiles=5.00] Richest 20%	0.157	0.141	-0.119	0.434	1.241	1	0.265
[Per Capita Income Quintiles=4.00] Second 20%	0.055	0.1329	-0.205	0.316	0.174	1	0.676
[Per Capita Income Quintiles=3.00] Middle 20%	0.079	0.1266	-0.169	0.327	0.39	1	0.532
[Per Capita Income Quintiles=2.00] Fourth 20%	0.198	0.1255	-0.048	0.444	2.492	1	0.114
[Per Capita Income Quintiles=1.00] Poorest 20%	0a
[Feelings About Household Income=5.00] DKRF	-0.995	0.3539	-1.689	-0.302	7.911	1	0.005
[Feelings About Household Income=3.00] Finding it Difficult	-2.177	0.1519	-2.474	-1.879	205.44	1	0
[Feelings About Household Income=2.00] Getting By	-1.049	0.0941	-1.233	-0.865	124.291	1	0
[Feelings About Household Income=1.00] Comfortable	0a
[Are you in a situation that you have freedom to choose what you do with your life?=4.00] DKRF	-0.331	0.2527	-0.827	0.164	1.718	1	0.19
[Are you in a situation that you have freedom to choose what you do with your life?=2.00] No	-0.906	0.0984	-1.099	-0.713	84.818	1	0
[Are you in a situation that you have freedom to choose what you do with your life?=1.00] Yes	0a
(Scale)	2.981b	0.0935	2.804	3.17			

a. Set to zero because this parameter is redundant.

b. Maximum likelihood estimate.

a. データ

日経 Well-being Initiative が 2021 年 Q2 (4-6 月期)より四半期に一度行っている調査データを活用した。本調査は調査対象が「日本在住の施設に入居していない 15 歳以上」であり、RDD 方式による電話調査（ただし福島県原子力被災 12 市町村を除く）によって毎四半期約 1000 人のデータを測定している。

b. 分析

現在の生活に対する自己評価、および 5 年後の生活に対する自己評価をアウトカムとし、説明要因としては過去の研究知見に基づき、世帯年齢、年齢、居住地、健康問題、助けを求められる人の数、十分な経済状況、婚姻状況、性別、雇用状況、教育水準、相対収入、世帯収入への認識、人生において自由に選択ができると感じるか、とした。分析は Generalized Linear Model を用い、現在の生活に対する自己評価をアウトカムとした結果を示した。

参考文献

- [1] 経済産業省. 「新しい時代の万博」の具体化に向けて [Internet]. 2019 [cited 2023 Mar 24]. Available from: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/goal3.html>
- [2] Diener E, Kahneman D, Helliwell J. International Differences in Well-Being. Oxford University Press; 2010.
- [3] Global Happiness Policy Report [Internet]. Global Happiness Council. [cited 2023 Mar 24]. Available from: <https://www.happinesscouncil.org/>
- [4] 村上隆晃. ここが知りたい『国民全体の幸せの指標、GDW (Gross Domestic Well-being) に注目』 [Internet]. 第一生命経済研究所. 2022 [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://www.dlri.co.jp/report/dlri/179355.html>
- [5] O'Mahony T. Toward Sustainable Wellbeing: Advances in Contemporary Concepts. Frontiers in Sustainability [Internet]. 2022;3. Available from: <https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/frsus.2022.807984>
- [6] Palahí M, Panssar M, Costanza R, Kubiszewski I, Potočník J, Stuchtey M, et al. Investing in Nature as the true engine of our economy: A 10-point Action Plan for a Circular Bioeconomy of Wellbeing. Knowledge to Action [Internet]. 2020 Jan 1 [cited 2023 Mar 30]; Available from: https://www.academia.edu/81413373/Investing_in_Nature_as_the_true_engine_of_our_economy_A_10_point_Action_Plan_for_a_Circular_Bioeconomy_of_Wellbeing
- [7] Gallup G. World poll methodology. Technical Report, Washington, DC; 2009.
- [8] Rowan AN. World Happiness Report 2022. WellBeing News. 2022;4(3):2.
- [9] OECD. How's Life? 2020 Measuring Well-Being. Paris Cedex, France: OECD; 2020. 246 p. (How's life?)
- [10] 内田由紀子. これからの幸福について : 文化的幸福観のすすめ. 新曜社; 2020.
- [11] Lomas T, Lai A, Shiba K, Diego-Rosell P, Uchida Y. Insights from the first global survey of balance and harmony. World happiness report [Internet]. 2022; Available from: https://scholar.google.ca/scholar?cluster=9140443660134848129&hl=en&as_sdt=0,5&sciodt=0,5
- [12] 外務省. SDG グローバル指標(SDG Indicators) - 3: すべての人に健康と福祉を [Internet]. JAPAN SDGs Action Platform. [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/goal3.html>
- [13] The Sustainable Development Solutions Network. 100. Evaluative wellbeing and positive mood affect - indicators and a monitoring framework [Internet]. Indicators and a Monitoring Framework (. [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://indicators.report/indicators/i-100/>
- [14] Veenhoven R. Happy life-expectancy. Soc Indic Res. 1996 Jan 1;39(1):1-58.
- [15] Layard R, Oparina E. Living long and living well: The WELLBY approach. World Happiness Report. 2021;191-208.
- [16] Cantril H. The pattern of human concerns. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press; 1965.
- [17] Gallup, Inc. Gallup Global Happiness Center [Internet]. [cited 2023 Mar 30]. Available from: https://www.gallup.com/analytics/349487/gallup-global-happiness-center.aspx?fbclid=IwAR0QkWHji5BSL5gLYXJfxGnClLvYnbB_Ry7hSwJzqBqJk3kM-QShpQVKHrA
- [18] ウェルビーイング学会. ウェルビーイングレポート日本版 2022 [Internet]. 2022 [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://society-of-wellbeing.jp/report/>
- [19] United Nations. World Population Prospects 2022 [Internet]. 2022 [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://population.un.org/wpp/Download/Standard/MostUsed/>
- [20] IHME. Global health data exchange [Internet]. [cited 2023 Mar 30]. Available from: <https://ghdx.healthdata.org/>
- [21] VanderWeele TJ. On the promotion of human flourishing. Proc Natl Acad Sci U S A. 2017 Aug 1;114(31):8148-56.
- [22] Chen L-Y, Oparina E, Powdthavee N, Srisuma S. Robust Ranking of Happiness Outcomes: A Median Regression Perspective. J Econ Behav Organ. 2022 Aug 1;200:672-86.
- [23] Sullivan DF. A single index of mortality and morbidity. HSMHA Health Rep. 1971 Apr;86(4):347-54.
- [24] Lutz W, Striessnig E, Dimitrova A, Ghislandi S, Lijadi A, Reiter C, et al. Years of good life is a well-being indicator designed to serve research on sustainability. Proc Natl Acad Sci U S A [Internet]. 2021 Mar 23;118(12). Available from: <http://dx.doi.org/10.1073/pnas.1907351118>

第四章 国内におけるウェルビーイング関連調査

ここまで、ウェルビーイング政策パッケージの提案や、ウェルビーイング指標に関するこれまでの潮流と指標間の比較を行ってきた。本章では、今回の提案であるウェルビーイング政策パッケージのロジックモデルを客観的結果から裏付けるような調査結果を報告する。

「1.北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査」では、北陸地方の石川県・富山県・福井県を対象として、性別や年齢などの人口統計学的特性ごとに主観的ウェルビーイングの分布を算出したほか、今後のわが国の重要な課題の1つと考えられる思春期を含む子どものウェルビーイングに焦点を当て分析を実施した。子どものウェルビーイングの重要性や課題については、本報告書で大きくは触れないが、日本の子どもの精神的健康度が諸外国と比較して低い結果を示している UNICEF のレポート¹⁴や、本研究プログラムで実施した国際会議の開催報告¹⁵を参照されたい。

「2.福井ウェルビーイング政策調査」では、地方自治体での政策の効果検証のインパクトとして主観的ウェルビーイングを設定した場合に、アウトカムレベルではどのような指標が設定でき、またアウトカムと主観的ウェルビーイングの関連を検証することを目的として、我々が今後の地方自治体のウェルビーイングを高めるための重点領域と考えた居場所・舞台、まちづくり、文化芸術、仕事、健康の分野においてアウトカムと主観的ウェルビーイングの関連を分析した。

1. 北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査

北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査では、北陸地方の石川県・富山県・福井県を対象として、人口統計学的な特徴ごとに主観的ウェルビーイングの分布の可視化を行った。また、本調査の特長は、16歳から19歳までの参加者が含まれていることであり、今後のわが国の重要な課題の1つと考えられる子どものウェルビーイングのうち、思春期に焦点を当て分析を実施した。

1) 北陸地方のウェルビーイングの全体像

- 現在の主観的ウェルビーイングについて、平均値は 5.7 であった。
- 男女別にみると、男性より女性の方が、わずかに平均値が高く、10代の平均値が高い一方、40代の平均値が最も低い結果となった。
- 世帯年収別にみると、1,000万円以上の層は、生活の満足度の平均値が最も高く 6.5 となっており、年収が高くなるにつれ、満足度の平均値も高くなる傾向にある。

図表 7 北陸地方のウェルビーイングの全体像（性別・年代別・最終学歴別・世帯年収別）

		0: 最悪な生活											10: 最も理想的な生活											平均																																																																																							
		1											2												3											4											5											6											7											8											9											10									
全体		5,813	2.0	1.4	3.1	7.9	9.1	22.7	15.0	19.0	13.7	2.8	3.4	2,941	2.1	1.7	3.4	8.8	9.5	22.5	14.8	18.6	12.7	2.4	3.4	2,872	1.7	1.2	7.7	8.7	22.9	15.3	19.5	14.7	3.1	3.5	576	0.7	2.9	7.7	15.8	12.5	22.6	21.5	5.9	8.8	790	1.6	1.2	7.3	9.7	21.5	16.0	17.7	15.3	3.6	3.8	906	2.4	1.8	2.6	8.0	8.9	22.4	15.6	19.6	12.5	2.9	3.2	1,264	2.3	1.6	3.1	8.7	10.8	24.7	15.8	18.4	9.2	1.9	3.0	1,127	1.6	1.9	4.4	8.7	8.1	23.5	16.6	19.0	12.0	1.8	2.1	1,149	1.6	1.3	3.6	8.7	8.7	24.0	12.6	18.5	16.1	2.3	2.4	5.7					
性別	男性	2,941	2.1	1.7	3.4	8.8	9.5	22.5	14.8	18.6	12.7	2.4	3.4	2,872	1.7	1.2	7.7	8.7	22.9	15.3	19.5	14.7	3.1	3.5	5.8																																																																																						
	女性	2,872	1.7	1.2	7.7	8.7	22.9	15.3	19.5	14.7	3.1	3.5	5.7																																																																																																		
年代別	10代	576	0.7	2.9	7.7	15.8	12.5	22.6	21.5	5.9	8.8	6.7																																																																																																			
	20代	790	1.6	1.2	7.3	9.7	21.5	16.0	17.7	15.3	3.6	3.8	5.9																																																																																																		
	30代	906	2.4	1.8	2.6	8.0	8.9	22.4	15.6	19.6	12.5	2.9	3.2	5.7																																																																																																	
	40代	1,264	2.3	1.6	3.1	8.7	10.8	24.7	15.8	18.4	9.2	1.9	3.0	5.4																																																																																																	
	50代	1,127	1.6	1.9	4.4	8.7	8.1	23.5	16.6	19.0	12.0	1.8	2.1	5.5																																																																																																	
	60代	1,149	1.6	1.3	3.6	8.7	8.7	24.0	12.6	18.5	16.1	2.3	2.4	5.7																																																																																																	
最終学歴別	中学校卒	108	5.0	5.4	6.2	16.6	7.0	28.9	11.8	9.1	5.7	1.5	2.7	4.6																																																																																																	
	高等学校卒/高等専門学校卒	1,828	3.2	2.2	4.2	9.2	10.8	26.4	12.7	15.9	10.6	1.9	2.8	5.3																																																																																																	
	短期大学/専門学校卒	1,227	1.1	1.5	3.1	8.5	8.7	24.1	15.2	19.4	13.1	2.2	2.7	5.7																																																																																																	
	大学卒	1,559	1.0	1.3	3.1	8.1	8.5	20.2	18.2	21.3	13.9	3.0	2.4	5.9																																																																																																	
	大学院修士課程/博士課程修了	181	1.1	1.2	3.8	3.2	6.5	20.1	18.8	24.1	14.7	2.3	3.9	6.0																																																																																																	
世帯年収別	150万円未満	404	7.2	3.2	6.8	14.2	6.2	21.0	12.8	10.9	10.6	2.3	4.7	5.0																																																																																																	
	150万円以上300万円未満	691	1.7	3.5	5.1	13.6	10.6	26.3	14.2	12.3	9.7	1.4	1.6	5.1																																																																																																	
	300万円以上500万円未満	1,093	2.4	1.6	4.0	10.5	12.8	24.5	15.4	15.1	10.2	1.6	1.0	5.3																																																																																																	
	500万円以上700万円未満	899	0.7	1.2	4.4	6.4	8.6	22.0	16.6	23.2	14.7	2.2	2.2	5.9																																																																																																	
	700万円以上1,000万円未満	646	1.0	1.1	3.1	8.0	19.6	18.7	26.2	16.4	2.8	2.3	6.2																																																																																																		
	1,000万円以上	346	1.0	1.1	3.8	4.3	16.1	15.5	26.7	18.0	6.2	5.5	6.5																																																																																																		

2) 思春期のウェルビーイング

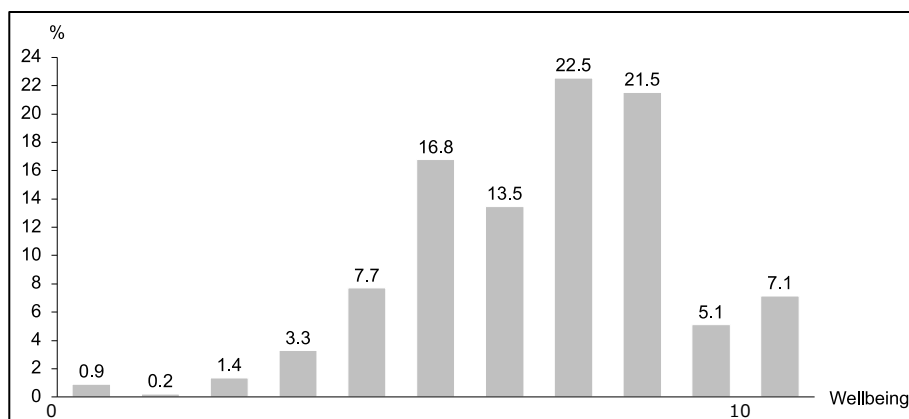
20歳以上を大人、16歳から19歳までを思春期として、思春期に関するウェルビーイングを調査した。

は思春期の主観的ウェルビーイングの分布であるが、大人の平均値が5.7であるのに対して、学生の平均値は6.6であり、平均値自体は学生の方が高い結果となった。本研究の標本では16歳から19歳までのサンプルサイズは全世代の中で最も小さいことおよびオンライン調査に回答する集団は必ずしも一般住民の代表ではない可能性に留意は必要であるが、本調査対象集団では、学生のウェルビーイングは相対的には大人のそれよりも良好と言えるかも知れない。しかし、図表8から読み取れるように10%強はウェルビーイングが4点以下であり、そうした相対的にウェルビーイングが低い層の特徴を把握することが必要と思われた。

そこで、学生における主観的ウェルビーイングの関連要因を明らかにすることを目的として、以下の指標を説明変数*、主観的ウェルビーイングを結果変数として、ロジスティック回帰分析を行った。図表9に示す通り、主観的健康観と、ソーシャルキャピタルの下位尺度である①社会的連帯、②互酬性が統計的に有意な関連要因であることが示された。統計的には有意とはいええないものの、中学生と高校生に比べると、大学生はウェルビーイングが低い結果となった。

*説明変数：性別、都道府県、学校（中学/高等学校/大学・その他）、主観的健康観、ソーシャルキャピタル(下位尺度①社会的連帯、②互酬性)

図表8 学生の主観的ウェルビーイングの分布 (n=832)



図表9 学生における主観的ウェルビーイングの関連要因

		OR	LowerCI	UpperCI	PValue
Sex	Men	1.00 (Ref)			
	Women	0.74	0.53	1.04	0.08
Prefecture	Ishikawa	1.00 (Ref)			
	Toyama	1.25	0.85	1.83	0.26
	Fukui	1.10	0.72	1.66	0.66
Job	Middle school	1.00 (Ref)			
	High school	1.02	0.62	1.67	0.95
	University and other	0.72	0.44	1.17	0.18
Self-rated health		1.51	1.40	1.63	0.00 ***
Social capital	Social_cohesion	1.25	1.00	1.57	0.05 *
Reciprocity	Reciprocity	1.65	1.30	2.09	0.00 ***

Signif. codes: <0.001: '***', <0.01: '**', <0.05: '*'

OR: Odds Ratio, CI: Confidence Interval

※ 現在の主観的ウェルビーイングを 0~10 までの 11 段階で調査した項目に対して、0~6 点を低群、7~10 を高群とする二値に設定して、ロジスティック回帰分析を実施した。

3) 本調査の実施結果から得られる示唆

北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査では、一般住民を性別や年齢などの人口統計学的特性で分けて分析するとともに、思春期の特徴を探索的に調査した。思春期と大人のウェルビーイングを比較すると、平均値では思春期の方が高いものの、研究の標本では16歳から19歳までのサンプルサイズは全世代の中で最も小さいことおよびオンライン調査に回答する集団は必ずしも一般住民の代表ではない可能性に留意が必要である。また、思春期のウェルビーイングに寄与する要因を探索的に分析し、統計的に有意な要因は主観的健康観と、ソーシャルキャピタルの下位尺度である①社会的連帯、②互酬性であった。今回の結果では思春期の方が大人よりも高い結果であったものの、上述のUNICEFレポートでは、日本の子どもの精神的幸福感が諸外国と比較すると低い結果とされており、思春期を含む子どもの主観的健康観など心身の健康を調査することは、実態把握の観点からも有意義であると考えられる。

これまで、思春期を含む子どものウェルビーイングについての国内調査の事例は極めて限られており、UNICEF^[3]やOECD^[4]のレポートにおいても子どもと大人のウェルビーイングの構成要素が異質であると指摘されていることに鑑みると、本調査のように子どもにおいてもウェルビーイングに関する調査を推進していくことが求められる。

参考文献

- [1] Gromada, Anna; Rees, Gwyther; Chzhen, Yekaterina (2020). Worlds of Influence: Understanding What Shapes Child Well-being in Rich Countries, Innocenti Report Card, no. 16, UNICEF Office of Research - Innocenti, Florence
- [2] 東京財団政策研究所, 【国際会議開催報告】子どものウェルビーイング (2023), <https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=4326>
- [3] UNICEF, Understanding child subjective well-being (2021), <https://www.unicef.org/globalinsight/reports/understanding-child-subjective-well-being>
- [4] OECD, Measuring What Matters for Child Well-being and Policies (2021), <https://www.oecd.org/wise/measuring-what-matters-for-child-well-being-and-policies-e82fded1-en.htm>

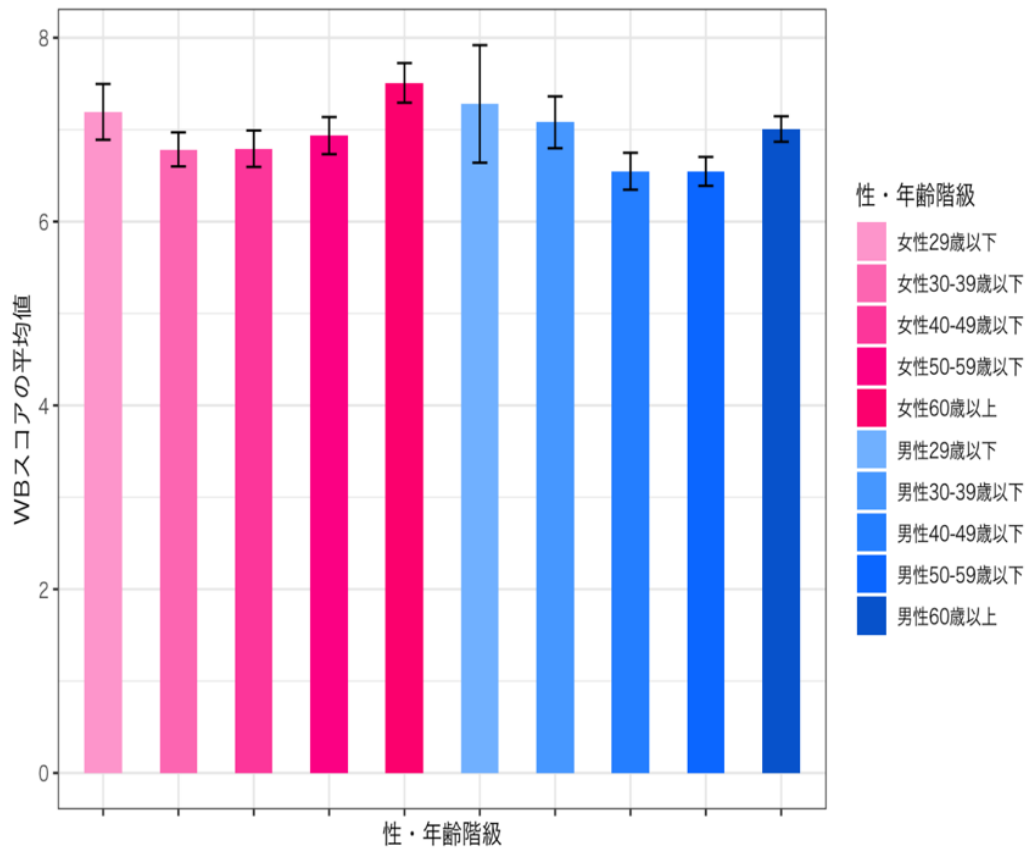
2. 福井ウェルビーイング政策調査

福井ウェルビーイング政策調査では、地方自治体での政策の効果検証のインパクトとして主観的ウェルビーイングを設定した場合に、我々が今後の地方自治体のウェルビーイングを高めるための重点領域と考えた居場所・舞台、まちづくり、文化芸術、仕事、健康の分野においてアウトカムレベルではどのような指標が設定でき、それらのアウトカムと主観的ウェルビーイングの関連の有無を検証することを目的とした。具体的には、居場所・舞台、まちづくり、文化芸術、仕事、健康の分野において、我々が提案する各アウトカム指標の候補と主観的ウェルビーイングの関連を分析した。加えて、地方自治体のウェルビーイング政策における優先的な対象集団を考える際に資する情報を提供するために、対象者の人口統計学的な特徴ごとの主観的ウェルビーイングを可視化した。

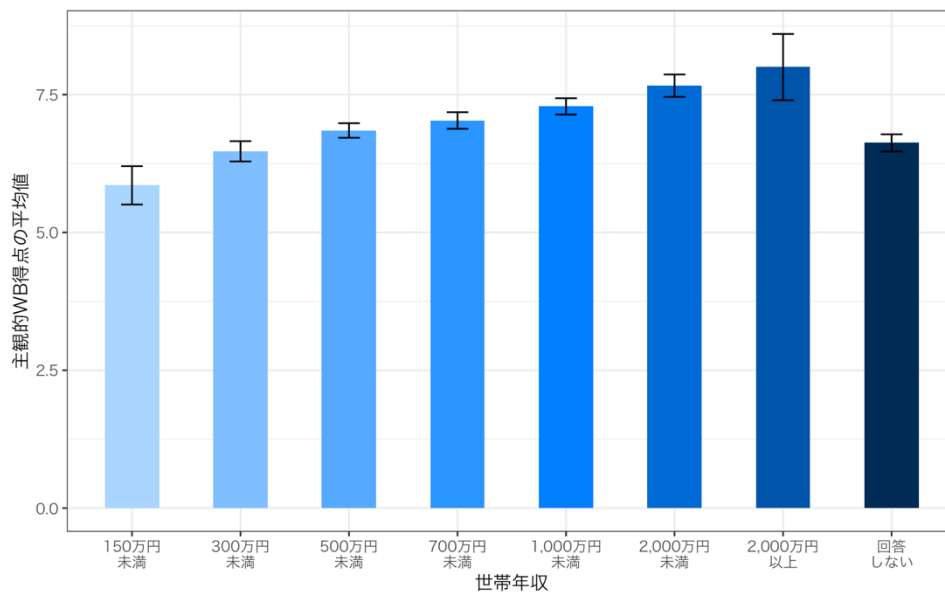
1) 主観的ウェルビーイングの全体像

- 住民全体の主観的ウェルビーイングの平均値は 6.9 であった。
- 性年齢別では、男女ともに年齢に対して 30-39 歳および 40-49 歳をボトムとする U 字カーブを描いた。
- 男女ともに 29 歳以下（最小値 20）の若年層のウェルビーイングは相対的に高く、男性は 7.1、女性は 7.2 であった。男女ともに中年層ではウェルビーイングが低く、男性では 40 歳から 59 歳、女性では 30 歳から 49 歳が最もウェルビーイングが低かった。一方で、60 歳以上の高齢者のウェルビーイングは相対的に高く、特に女性では 60 歳以上の高齢者のウェルビーイングが 7.5 と、全年齢層の中で最も高かった。
- 世帯収入別では、150 万円未満が最も低く、2,000 万円以上が最も高い結果であり、世帯収入が高くなるほど、ウェルビーイングの平均値は高くなる傾向の結果となった。

図表 10 主観的ウェルビーイングの全体像（性別・年代別）



図表 11 主観的ウェルビーイングの全体像（世帯収入別）



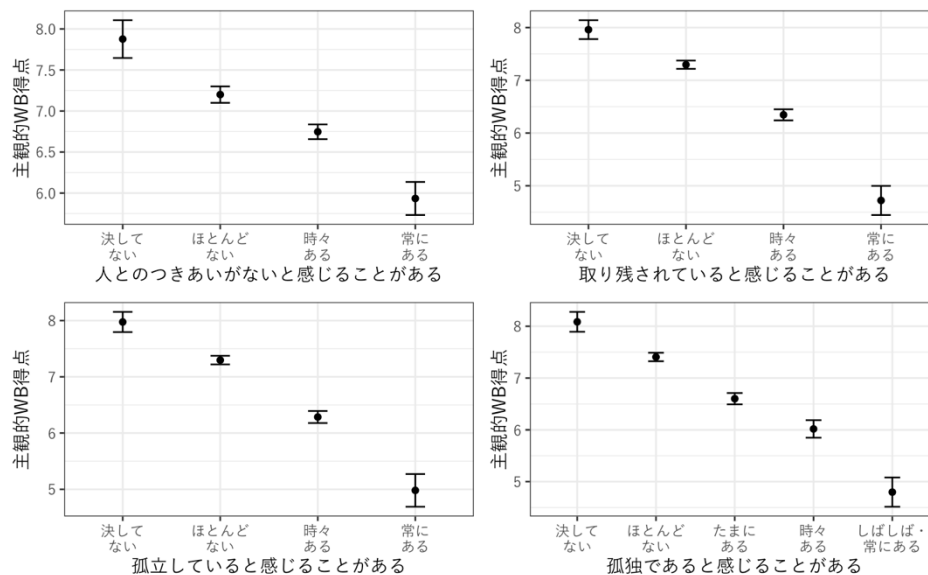
2) 孤独・孤立とウェルビーイングの関連

本研究プログラムでは、ウェルビーイング政策を「住民のウェルビーイングの増進を目指し、望まない孤独・孤立を予防し、多様なつながりを育める生活を支える政策」と捉え、地方自治体のウェルビーイング政策推進に関する調査研究を行った。

そこで、各分野のアウトカムと主観的ウェルビーイングの関連を検討する前に、孤独・孤立とウェルビーイングに負の相関があるかを検証することとした。

結果は、図表 12 に示す通り、人との付き合いがないと感じることがあること、取り残されていると感じることがあること、孤立していると感じることがあること、孤独であると感じることがあることで、それぞれウェルビーイングが低い結果となり、孤独・孤立とウェルビーイングの負の関連が示された。

図表 12 孤独・孤立の指標と主観的ウェルビーイングの関連



3) 各政策分野の KPI と主観的ウェルビーイング

2)の結果から、望まない孤独・孤立とウェルビーイングの負の関連が確認でき、ウェルビーイング政策を「住民のウェルビーイングの増進を目指し、望まない孤独・孤立を予防し、多様なつながりを育める生活を支える政策」とする本研究プログラムの設定が一定の妥当性を有すること、望まない孤独・孤立を予防することがウェルビーイング向上にも影響がある可能性が示唆された。

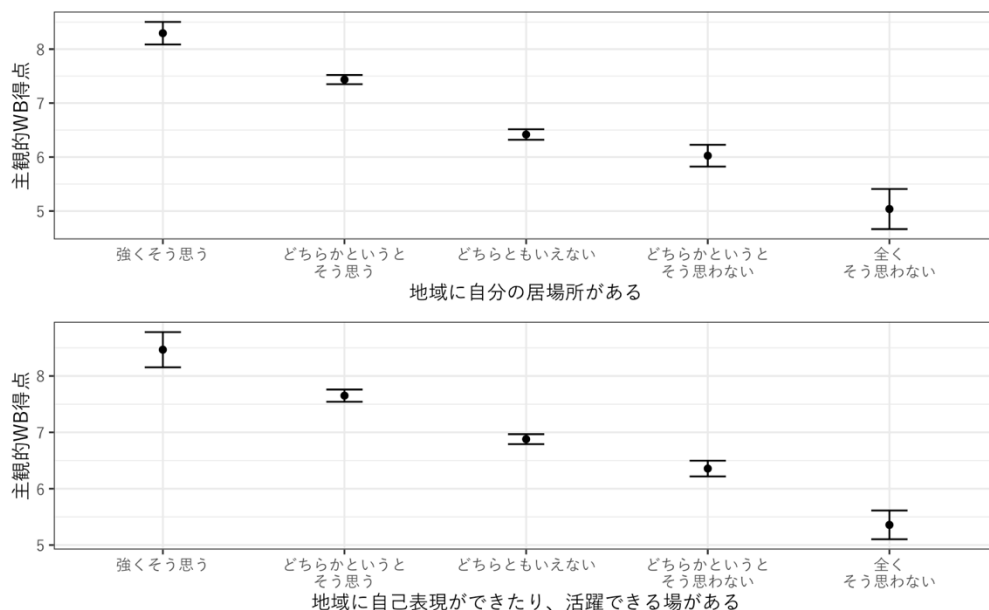
上記を踏まえ以下では、第二章のフレームワーク内でのアウトカムとインパクトとの関係、すなわち各政策分野で KPI となりうる指標とウェルビーイングの関連について、試行的に「まちづくり」「健康」「文化・芸術」「仕事」という4分野を設定し、分析する。

① まちづくり分野 KPI と主観的ウェルビーイングの関連

まちづくり分野での KPI は、住民が自地域に居場所や舞台があると感じることとウェルビーイングの正の関連が示された。詳細結果は以下の通り。

- ✓ 『地域に自分の居場所があると感じる』では、「そう思う計」は 53%であり、「そう思わない計」の 15%を大きく上回った。性年代別にみると、男性 50 代以下は「そう思う計」が 4 割台で低かった。
- ✓ 『地域に自己表現できたり活躍できる場があると感じる』では、「どちらともいえない」が 41%で最も高く、「そう思う計」「そう思わない計」はいずれも 3 割で拮抗していた。
- ✓ まちづくり活動・地域活動への参加率は 44%であった。性年代別に参加率をみると、男女とも年代が上がるほど高く、男性 60 歳以上は 65%、女性 60 歳以上は 56%と高かった。
- ✓ 地域に自分の居場所があると思う人ほど有意にウェルビーイングが高かった。（図表 13）
- ✓ 地域に自己表現ができたり、活躍できる場所があると思う人ほど有意にウェルビーイングが高かった。（図表 13）
- ✓ まちづくり活動・地域活動をしている人ほど有意にウェルビーイングが高かった。

図表 13 まちづくり分野の KPI と主観的ウェルビーイングの関連

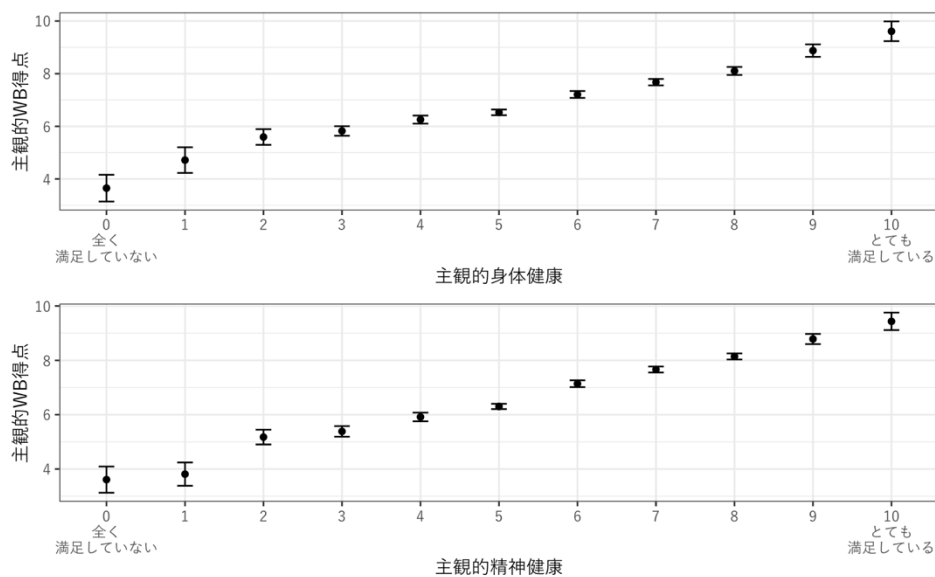


② 健康分野 KPI と主観的ウェルビーイングの関連

健康分野での KPI については、主観的健康観（健康全般、身体的健康、精神健康いずれも）とウェルビーイングの正の関連が示された。詳細結果は以下の通り。

- ✓ 健康全般についての満足度は「5」が22%で最も高く、平均は5.5であった。性年代別に平均をみると、男性30代、女性29歳以下の平均が6.0と高く、男性40代は5.1で最も低かった。
- ✓ 自身の健康全般に満足している人ほどウェルビーイングが高かった。
- ✓ 身体的健康についての満足度も「5」が21%で最も高く、平均は5.5であった。性年代別に平均をみると、男性30代以下の平均が6を超えて高く、男性40代は5.1で最も低かった。
- ✓ 自身の身体的健康に満足している人ほどウェルビーイングが高かった。（図表14）
- ✓ 精神健康についての満足度も「5」が20%で最も高く、平均は5.9であり、身体的健康より精神健康の満足度が高かった。性年代別に平均をみると、女性60歳以上の平均が6.5で最も高く、男性40～50代は5.4で最も低かった。
- ✓ 自身の精神健康に満足している人ほどウェルビーイングが高かった。（図表14）
- ✓ 現在のこころの状態の各症状を感じた（少しだけ～いつも計）との回答では、『神経過敏に感じた』64%、『何をするのも骨折りだと感じた』63%、『気分が沈み込んで、何か起こっても気が晴れないように感じた』61%と6割を超えて高い。以下、『そわそわ、落ち着かなく感じた』55%、『自分は価値のない人間だと感じた』48%、『絶望的だと感じた』46%となっており、各症状を感じた人は約5割以上とみられた。性年代別にみると、『気分が沈み込んで、何か起こっても気が晴れないように感じた』『そわそわ、落ち着かなく感じた』『自分は価値のない人間だと感じた』では、女性30代以下、男性40代が全体的に高めであり、男女60歳以上では低い傾向であった。

図表 14 健康分野の KPI と主観的ウェルビーイングの関連

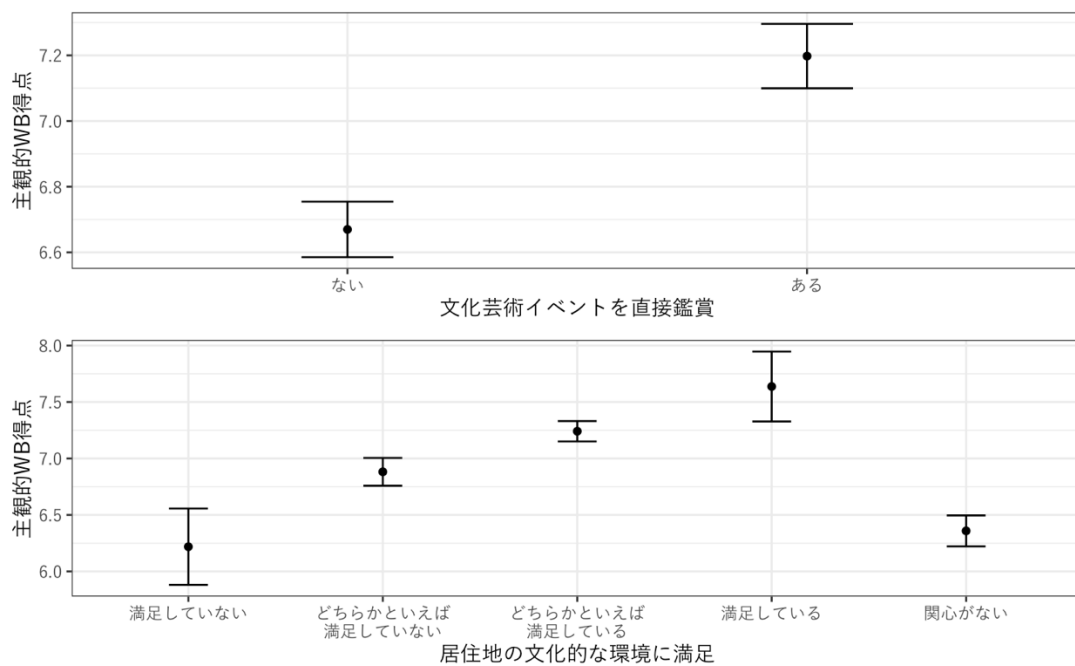


③ 文化・芸術分野 KPI と主観的ウェルビーイングの関連

文化・芸術分野の KPI では、文化・芸術への参加機会とウェルビーイングには関連があったが、鑑賞機会に関しては統計的に有意な関連が見られなかった。また、住まいの地域の文化・芸術環境に満足している人ほどウェルビーイングが高く、住まいの地域の文化・芸術環境に関心がない人はウェルビーイングが低かった。詳細結果は以下の通り。

- ✓ この1年間で文化・芸術イベントの鑑賞経験がない人は59.8%で、文化・芸術イベントの鑑賞経験のある人の方がいない人よりウェルビーイングが有意に高かった。(図表15)
- ✓ この1年間で文化・芸術活動の実践やボランティア活動の支援経験がある人は13.6%で、実践している人の方が実践していない人よりウェルビーイングが有意に高かった
- ✓ 住まいの地域の文化・芸術環境に満足している人ほどウェルビーイングが高く、住まいの地域の文化・芸術環境に関心がないひとはウェルビーイングが低かった。(図表15)

図表15 文化・芸術分野の KPI と主観的ウェルビーイングの関連

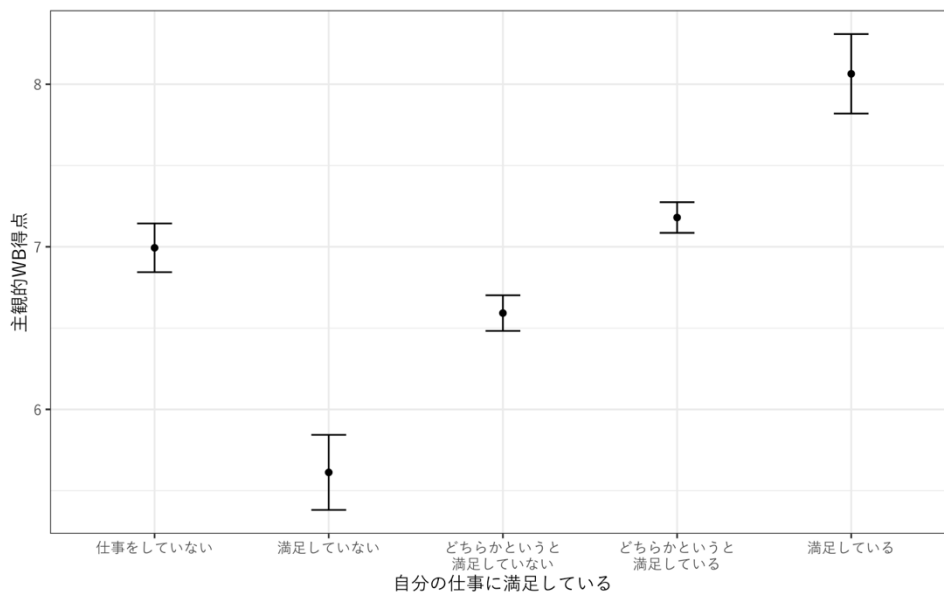


④ 仕事分野 KPI と主観的ウェルビーイングの関連

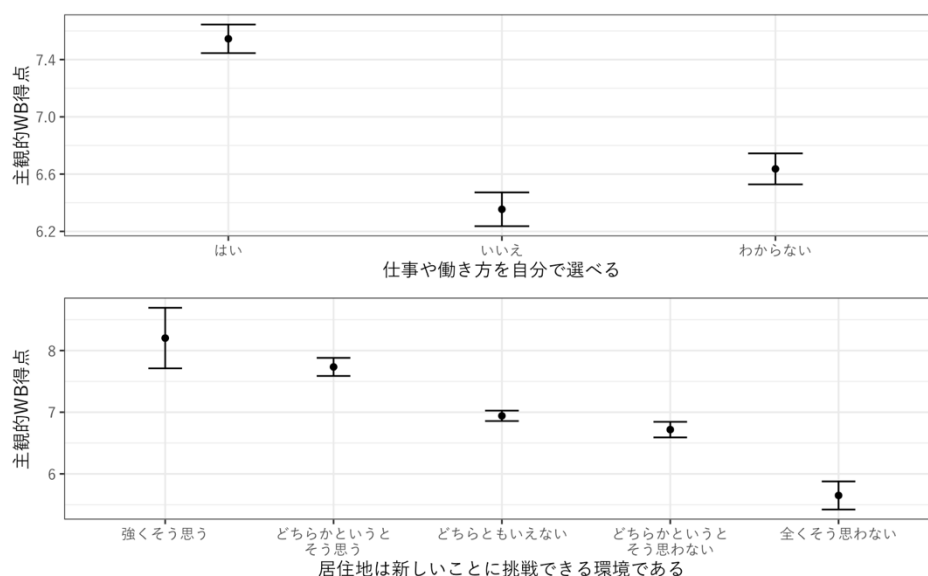
仕事分野の KPI で、仕事に関する満足度とウェルビーイングに正の関連が見られた。また、仕事や環境を自分で選べると感じること、居住地は新しいことに挑戦できる環境であると感じる人ほどウェルビーイングが有意に高い結果であった。詳細結果は以下の通り。

- ✓ 仕事や働き方について「選べる（「はい」と回答）」は 40%、「選べない（「いいえ」と回答）」は 30%。性年代別にみると、「選べる（はい）」の回答は、男性 29 歳以下、男女 60 歳以上で高かった。男性 30～50 代は「選べない（「いいえ」と回答）」が 4 割と高かった。
- ✓ 有職者の仕事に対する満足度（満足している計）は 54%で過半数を占めているものの、不満度（満足していない計）も 46%と高かった。性年代別にみると、男性 30～50 代、女性 30 代は不満度が満足度を上回っており、仕事に対する満足度は低かった。一方、男女 60 歳以上での満足度は 6 割を超えて高かった。
- ✓ 自分の仕事に満足している人ほど有意にウェルビーイングが高かった。（図表 16）
- ✓ 仕事や環境を自分で選べる人の方が有意にウェルビーイングが高かった。（図表 17）
- ✓ 居住地は新しいことに挑戦できる環境であると思う人ほど有意にウェルビーイングが高かった。（図表 17）
- ✓ 現在の家庭生活の満足度（満足している計）は 67%、不満度（満足していない計）は 33%であり、全体の 7 割は現在の生活に満足している。性年代別にみると、女性 29 歳以下、男女 60 歳以上の満足度が 7 割を超えて高かった。

図表 16 仕事分野の KPI と主観的ウェルビーイングの関連（仕事の満足度）



図表 17 仕事分野の KPI と主観的ウェルビーイングの関連
 (仕事や働き方を自分で選べること・新しいことに挑戦できる環境)



3. 二つの調査結果を踏まえた考察

本章における「1.北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査」では、思春期の主観的ウェルビーイングについて探索的分析を行い、主観的健康観やソーシャルキャピタルの要因が主観的ウェルビーイングと関連していることを明らかにしたが、思春期を含む子どもへのウェルビーイング調査を行う上での課題や今後のさらなる調査の必要性が確認された。「2.福井ウェルビーイング政策調査」では、地方自治体での政策の効果検証のインパクトとしての主観的ウェルビーイングに資するアウトカムとして、居場所・舞台、まちづくり、文化芸術、仕事、健康分野の KPI となりうる指標と主観的ウェルビーイングの関連を分析した。結果として、いずれの分野においても、KPI となりうる指標と主観的ウェルビーイングの関連が示され、また、重回帰分析で性・年齢の影響を調整しても、主観的ウェルビーイングと各政策分野の KPI は一貫して関連が見られた。本研究プログラムで提案する政策フレームワークにおける、インパクトと各分野のアウトカムの関連が明らかになったと言えるだろう。

第五章 都道府県ウェルビーイング政策実態調査・ウェビナーの開催

1. 都道府県ウェルビーイング政策実態調査

近年、人々のウェルビーイングあるいは生活の豊かさ実感を高めることを目標として政策立案・評価を行おうとする取り組みは世界的にも多く見られるようになってきているが、その施行主体は国であることが多く、地方自治体レベルでのウェルビーイング政策への取り組みは世界的にも先進的である。ここでは、都道府県におけるウェルビーイング政策の取り組み状況を公表資料から調査した結果について報告する。

本研究プログラムでは、ウェルビーイング政策の実行過程を以下の3つの段階に分けて整理した。

- ① 住民のウェルビーイング、生活満足度あるいは幸福度の向上を目標として掲げる段階
- ② 住民の全般的なウェルビーイングのみモニタリングし、領域別のブレイクダウンは行っていない段階
- ③ 住民のウェルビーイングを領域別にモニタリングし、結果を政策立案・政策評価へ活用する段階

②と③は、領域別のモニタリングを行っているかどうかで分類した。②における全般的なモニタリングとは、例えば、「現在、あなたはどの程度幸せですか。」という質問に対して10段階で答えるといった質問を県民意識調査などに盛り込んでいることを指す。

これに基づき、2023年4月時点での47都道府県の公表資料から、各都道府県のウェルビーイング政策への取り組み状況をStep 0からStep 3に分類した。

取り組み段階ごとの都道府県数は図表18の通りである。なお、ここでは、各自治体の現時点（2023年4月時点）での取り組みのみに着目し、過去にウェルビーイング政策を行っていたかどうかについては考慮していない。

図表18 47都道府県のウェルビーイング政策への取り組み状況（2023年4月時点）

	Step.0	Step.1	Step.2	Step.3
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取り組みなし 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ウェルビーイング、生活満足度、あるいは幸福度の向上を目標として掲げる ・ 調査は行っていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 住民の全般的なウェルビーイングに関する調査のみを行っている ・ 領域別のブレイクダウンは行っていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 住民のウェルビーイングを領域別にモニタリングしている ・ 調査結果を政策立案・政策評価へ活用し、報告している
都道府県数	<p>29/47 都道府県</p>	<p>9/47 都道府県</p>	<p>4/47 都道府県</p>	<p>5/47 都道府県</p>

15程度の都道府県がウェルビーイングあるいは幸福度の向上を政策目標の一部として掲げ、10程度の都道府県が、ウェルビーイングあるいは幸福度に関して何らかの調査を行っている。

しかし、調査結果を具体的な政策評価・政策立案に活用するためには政策領域別のモニタリングが必要であるため、この点から政策領域別のモニタリングを実施している茨城県、岩手県、熊本県、群馬県、富山県（五十音順）が特に先進的であると考えられた。これらをStep 3として取り出した。なお、各県の取り組みの特徴については東京財団政策研究所ホームページで公開済みのReview「都道府

県におけるウェルビーイング政策の現状と今後の課題

(<https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=4362>)」を参照されたい。

本調査から、各県は独自の特性を活かし、個別の指標体系を構築していることが確認された。ウェルビーイング指標は都道府県の政策立案において自治体の内外への羅針盤として重要な役割を果たしていると言える。しかしながら、各県が独自のアプローチで取り組むことから、全国的な地方自治体ウェルビーイング政策に関する知見が蓄積されにくい状況となっている。例えば、指標を政策立案・政策評価につなげる上で主観的指標・客観的指標のそれぞれをどのような目的でどのように測定すべきかについてはどの県においても確固たる見解が得られていないと考えられる。また、福井県など、本研究プログラムの分類において **Step 1** あるいは **Step 2** にあたる、領域別の指標作成までには至っていない都道府県のいくつかは指標作成を含めたウェルビーイング政策の推進を発表しており、ウェルビーイング政策という新しい分野における実践的な議論がますます求められている。そのため、現在ウェルビーイング政策を推進している自治体間で優良事例や課題を共有する場を持ち、ウェルビーイング政策の定義や意義、運用方法、政策評価の方法などについて議論を深める必要があるだろう。その一つのアプローチとして、本プログラムでは下記のウェビナーを開催した。

2. ウェビナー「都道府県で共創する未来 ～ウェルビーイング政策に関する優良事例の共有と連携強化～」

本研究プログラムでは、都道府県ウェルビーイング政策に関する情報共有、連携強化、優良事例の横展開を目的として、ウェビナーと意見交換会を実施した。意見交換会は都道府県の政策担当者のみを対象として対面の形で行い、9県（茨城県、岩手県、沖縄県、熊本県、群馬県、滋賀県、富山県、福井県、山形県）からの参加を得た。ここでは、意見交換会で交わされた議論を中心に、都道府県ウェルビーイング政策の課題と展望について述べる。

1) 都道府県がウェルビーイングを旗印として掲げることによる効果

まず、都道府県がウェルビーイングを旗印として掲げることにより生じる効果について述べる。ウェルビーイングとして行政が取り扱う分野は、これまで福祉として取り扱われてきた分野とその多くが重なる。それにも関わらず、ウェルビーイングを行政が旗印として掲げ、ウェルビーイング指標を運用することにはどのような意義があるだろうか。

すでにウェルビーイング指標を導入している県から以下のような意見が挙げられた。

- ウェルビーイングを可視化できたことで、ウェルビーイングの向上を目的とした政策について考えられるようになった。
- 県庁内で部局横断的な目標を持つことができた。
- ウェルビーイングを旗印として大局的に政策を整理する中で、取り組みが弱い分野を見つけることができた。
- ウェルビーイングが地域ごとや個人で多様であることを再認識できた。
- 主観的ウェルビーイングを評価することで、住民が政策に対してどのような考えを持っているのかという政策の質的な評価が可能となった。

2) 都道府県ウェルビーイング政策における課題

しかし、都道府県ウェルビーイング政策を効果的に実行するにはいまだ課題が残る。ウェルビーイング指標を基にした施策の立案・効果検証が難しい要因は大きく以下の3つに分けられる。特に①については、第一章で触れた課題設定と方向性を同じくする課題であり、政策担当者からの声としても、主観的ウェルビーイングを政策のなかでどのように位置付けるかについて課題があることが改めて浮き彫りとなった。

① 総合的な主観的ウェルビーイングを変動指標として取り扱いにくいこと

総合的な主観的ウェルビーイング、あるいは、幸福度の総合実感は短期間で変動しないことが世界的な調査で明らかになってきた。本邦においても、主観的ウェルビーイングを10年前後にわたり観測してきた熊本県と岩手県の調査で同様の傾向が見られた。したがって、総合的な主観的ウェルビーイングを短期的な変動指標として捉え、県の成果としてその向上を目指すことには様々な課題がある。また、そもそも、集団のウェルビーイングを「向上させる」という考え方自体の危険性を指摘する県もある。例えば、岩手県では、集団のウェルビーイングを「向上させる」という考えはなく、あくまで気づきを得られるツールとしてウェルビーイング指標のモニタリングを行っている。

② 住民のウェルビーイングに対する県政の影響が限定的であること

住民のウェルビーイングに関する調査結果を解釈する上で、県の取り組みによる要素を他の要素から分離することは困難である。そもそも個人のウェルビーイングは政策以外の要素が多く含まれ、さらに、政策の要素の中にも、県の取り組みだけでなく、国や市の取り組みが含まれる。住民のウェルビーイングを解釈する上でこれらの要素を分離することは難しく、また、政策立案の段階においてもウェルビーイングに関わる全ての領域について県政が関与することはできない。

③ ウェルビーイングに関するロジックモデルの検証にコストがかかること

いくつかの都道府県ではすでにロジックモデルの構築が行われている。ロジックモデルの可視化により、県庁内、あるいは県民に対して理解の不一致が起こりにくくなるため、ロジックモデルの構築は非常に重要である。しかし、ウェルビーイングに関わる全ての政策領域でロジックモデルの検証を頻繁に行うことは人的資源などが限られる中においては難しい。

3) 都道府県ウェルビーイング政策における課題の解決策

前項の課題と対応させて、その解決策について考察する。

① ウェルビーイング指標の活用方法を定める

ウェルビーイング指標をどのように取り扱うべきかについてはグローバルでもいまだ結論が出ていない。本邦の先進事例では、以下のようにウェルビーイング指標が活用されており、その事例から見えてくる解決策の方向性を検討する。

(ア) 総合的なウェルビーイング指標の取り扱い

総合的な主観的ウェルビーイングは個別の事象に対する反応性が低く、変動しにくい指標である。そのため、施策のアウトカムとして総合的な主観的ウェルビーイングのみを用いることは難しい。しかし、住民を属性ごとに層別化することで主観的ウェルビーイングが低い層を同定し、重点的に対策を行うべきターゲットの絞り込みを行うことは非常に有効である。

例えば、若年女性のウェルビーイングが低いことは多くの県で指摘されているが、それだけでなく、例えば富山県では40代の男女と製造業従事者の総合的な主観的ウェルビーイングが低いことが調査で明らかになった。40代に介入する行政サービスが少なく不十分であったという発見があった他、富山県の主力産業である製造業従事者のやりがいや働きがいが低いという気づきにより、設備支援のようなハード面からのアプローチだけでなく、そこで働く人々の働きがい向上や夢や目標の実現という観点での施策が必要であるとの仮説につながっている。

(イ) 主観的ウェルビーイング指標と、領域ごとの客観的ウェルビーイング指標の取り扱い

主観的ウェルビーイングと客観的ウェルビーイングはそれぞれ役割が異なる。主観的ウェルビーイングは変動しにくく長期的な指標として捉えられる一方で、領域ごとの客観的ウェルビーイングは短期的な指標として捉えられる。また、客観的指標は施策との連動性が高く、対外的に説明する際に用いやすいという特徴がある。例えば、茨城県は客観的指標のみで他県との順位付けを行うことで客観的に自県の強みと弱みの把握を行っている。茨城県は犯罪防止に関する指標が全国の中で相対的に低いという課題を把握し、住宅侵入を防ぐ街頭防犯カメラを増やすなどの取り組みにつなげている。

一方で、客観的指標のみではカバーしきれない領域があることもまた指摘されるところであり、主観的ウェルビーイングの測定も必要である。例えば、富山県では若者の主観的ウェルビーイングの測定結果から、総合的な主観的ウェルビーイングは高いものの地域とのつながりに関する要素が弱いことを捉えている。この結果は、若者の県外への流出と関連すると考えられ、富山県は10～20代の若者をターゲットとして地域との良好なつながりの実感を向上させる施策を立案することで、県内で自己実現が達成できるようなワクワク感の向上を目指している。

なお、主観的ウェルビーイングを領域ごとに評価する方法はさまざまである。例えば、熊本県は満足度だけでなくその領域を重視するかどうかという質問を同時に行っており、それにより領域ごとにウェイトを付けた整理を可能にしている。一つ一つの領域について、個人がウェルビーイングの要素の一つとしてその領域を重要と捉えているかどうかで個人のその領域における満足度の意味合いも変わる。そのため、満足度とその領域を重視するかどうかを同時に評価することが、行政として介入すべき領域の優先順位付けに役立っている。

さらに、主観的ウェルビーイングは人と数値を比較するものではなく、自分にとってのウェルビーイングが何かということを知覚し、多様性を認めあうツールとしても働く。例えば、富山県は一人ひとりのウェルビーイングを花の形で表す取り組みを行なっている。具体的には、「現在の総合実感」を花の中心に据え、「心身の健康」や「経済的ゆとり」など7つの要素を花びら、「調和とバランス」をそれらを支える茎、「家族、友人、職場・学校等、地域とのつながり」を葉、さらに、生活の基盤として根をはる「富山県とのつながり」を土壌に見立てウェルビーイングを表現している。ウェルビーイングを構成する要素をわかりやすくビジュアル化することで県民一人一人がウェルビーイングを自分ごととして捉えることが可能となり、また、指標同士の関係性を直感的に理解しやすくしていると考えられる。

また、主観的ウェルビーイング指標の別の意義として、主観的ウェルビーイングと客観的ウェルビーイングとの間でギャップのある領域を見つけられるということがある。領域によっては、主観的ウェルビーイングと客観的ウェルビーイングの測定結果にギャップが存在し、そこに課題やニーズが隠れている可能性がある。たとえば、滋賀県では、毎年度実施している「県政世論調査」において設定している「公共交通が整っていると思うか」という質問に対して、都市部はそれ以外の地域と比較して公共交通が整っているにも関わらず、都市部の方が「整っていない」という回答が多くなった年があった。そのギャップの原因について、都市部の方が公共交通に対する期待値が高いためであるのか、あるいは、細かく分析すれば層ごとに需要が異なっているのか、それはなぜなのか、評価と意味の解像度を上げることで課題や解決策が見える可能性がある。なお、第二章で提案している政策フレームワークは、主観的ウェルビーイングを政策インパクトとして位置付け、主観的ウェルビーイングにつながる政策分野ごとのアウトカムを設定するというロジックを示しているものである。

② 住民のウェルビーイングに対して県政として関与できる分野の絞り込みを行う

住民のウェルビーイングを構成する要素の中で、県としてできることは限定的であり、具体的に施策に落とし込む際には分野を絞る必要がある。

例えば、多くの県で若年女性のウェルビーイングが低いという課題が指摘されている。この課題に対する県の施策として、家庭科の充実、放課後プログラムの充実による体験格差の解消、地元国公立大学への進学率の向上、男性側のジェンダーバイアス是正のためのスキル向上などが考えられる。若年女性のウェルビーイングの低下は、20代、30代の女性の県外への転出と関わっており、転出率を下げるためには10代にアプローチすることが必要である。

家庭科教育を充実させることは、男女の家事参加率の不均衡の是正やSDGsの浸透などにつながり、生活における基本的な価値観を育む中でその地域で過ごすことの素晴らしさを実感することにもつながる。

あるいは、学校の空き時間である放課後の時間にさまざまな体験プログラムを提供することも有効であると考えられる。現在行われている学童保育は生活の場としてのみ捉えられているが、そうではなく、地域のさまざまな人々が参画し、体験を共有する場としての放課後教育が、体験格差の是正につながり、子どもたちの現在から将来にわたるウェルビーイングや進学率の向上につながると考えられる。

また、地元の国公立大学への女性の進学率を上げるような施策を行うことも、若年女性がその地域で暮らすことに自信や希望を持つことにつながる。

さらに、男性側のジェンダーバイアスを是正する施策も有効である。特に地方においてはジェンダーバイアスがまだ根強く存在し、ウェルビーイングと強く関係する要素である生活上での選択肢を狭め自己決定を妨げることで、若年女性のウェルビーイングを大きく低下させていると予想される。

③ 領域ごとに濃淡をつけたロジックモデルの構築と分析を行う

いくつかの県ではウェルビーイング政策におけるロジックモデルの構築がすでに進められている。ウェルビーイングを旗印として、客観的な指標と主観的な指標が互いに補完し合うようなロジックモデルの構築が必要と考えられる。しかし、ウェルビーイングに関わるすべての領域におけるロジックモデルを頻繁に評価することは行政リソースが限られる中においては負担が大きく、領域ごとに評価のウェイトに濃淡をつけることが、ウェルビーイング政策をより多くの自治体で実践する上で必要であると考えられる。

4) ウェビナーおよび意見交換会における議論のまとめ・考察

地方自治体ウェルビーイング政策は、一見、地方自治法にうたわれている「住民福祉の増進」に向けた取り組みの呼び方を変えただけのようにも捉えられる。

しかし、ウェルビーイングを旗印とすることは、既存の取り組みをウェルビーイングという枠組みで整理し直す中で、これまで足りなかった視点に気づくことができるという大きな意義がある。これまで福祉が行き届いていなかったターゲット層を発見し、また、文化・芸術などのこれまで行政であまり顧みられなかった領域の重要性を再検討することにつながる。また、県内での地域ごとのウェルビーイングの違いを明らかにすることは、市町村がそれぞれの地域の特性を生かした施策を行うことにも役立つ。さらに、ウェルビーイングを旗印とすることは、縦割りになりがちな行政の取り組みに横串を入れ、部署間の連携を促すことにもつながる。

なお、ウェルビーイング政策を実践する上では、主観的指標と客観的指標の両方を組み入れたウェルビーイングのロジックモデルを構築し、施策の立案・評価を行う必要がある。ただし、指標を施策の立案・評価に用いる上では、全体的な主観的ウェルビーイングは変動しにくいことを念頭に置き、主観的ウェルビーイングに影響すると予想される、領域ごとの下位指標を評価して運用することが大切である。また、ウェルビーイングを構成する要素の中でも行政として関与できる領域とそうでない領域とに分けてロジックモデルの運用に濃淡をつけ、分野を絞って具体的な取り組みを行うことが必要と考えられる。

第六章 総括

本研究は、地方自治体におけるウェルビーイング政策の推進に焦点を当て、ウェルビーイング政策推進に資する指標の整理や新たな指標の開発、ウェルビーイング関連オンライン調査、政策パッケージの開発を行った。

北陸地域子ども（思春期）ウェルビーイング調査では、思春期の主観的ウェルビーイングについて探索的分析を行い、主観的健康観やソーシャルキャピタルの要因が主観的ウェルビーイングと関連していることを明らかにしたが、思春期も含む子どもへのウェルビーイング調査を行う上での課題や今後のさらなる調査の必要性が確認された。福井ウェルビーイング政策調査では、まちづくり、文化・芸術、健康、仕事の分野において、地方自治体がウェルビーイングを推進する上でアウトカムとして設定しうる指標と主観的ウェルビーイングを明らかにした。これにより、主観的ウェルビーイングに資するアウトカムを各分野において設定することが、ウェルビーイング政策を体系的に推進することの手がかりとなることが示唆された。

また、ウェルビーイングに関するさまざまな指標が存在しており、地方自治体において活用しうるウェルビーイング指標が明確になっていないという課題認識から、指標に必要とされる条件を整理し、「健幸量」という、簡便かつ現在から将来にわたるウェルビーイングを評価できる指標を独自に開発した。既存の指標と「健幸量」を用いて国際間比較を実施し、「健幸量」が既存指標に知見を加える点を考察した。

上記の活動に加え、地方自治体においてウェルビーイング政策がどの程度展開されているかの全国調査を実施し、先進的な取り組みを進めている都道府県を中心に、ウェルビーイング政策推進に関連するイベントを開催した。ウェルビーイング政策の好事例を該当する県の担当者から紹介してもらうことや、政策推進において抱える課題を意見交換することにより、政策担当者間での情報交換や連携の足がかりとすることができた。

本研究プログラムの成果物として、地方自治体レベルでのウェルビーイング政策推進に資するエビデンスや政策パッケージの在り方を提示した。内容は、地域のウェルビーイングをあくまで最終インパクトに据え、特定政策分野ごとの効果検証対象となるアウトカムの KPI 達成を目指し、インプットとアウトプットを各自自治体が地域の实情にあわせて試行錯誤することができるロジックモデルとした。このロジックモデルの考え方が、各地方自治体に合わせて横展開可能なウェルビーイング政策推進の一つの起点となるだろう。

付録

ウェビナー「都道府県で共創する未来～ウェルビーイング政策に関する優良事例の共有と連携強化～」 現地アンケートの抜粋

① 今回のウェビナーについて、良かった点・学びになった点

- 各県さまざまな背景がある中で目指している方向性が同じであることに感銘を覚えた。また、おのおのが抱える悩みや課題を共有することができ、併せて今後取り組みを進める上でのヒントをいただくこともでき、大変有意義であった。

② 今回のウェビナーの前後で、ご自身の考えで変わったこと

- 主観的なウェルビーイングについては、政策立案等にはあまり活用できない認識でいたが、年齢別や従事産業別に分析して政策を検討している事例を聞いて、認識を改めた。
- ウェルビーイングの考え方として、石川先生から「言葉は新しいが、取り組み自体はこれまでもしてきたこと、再発見であるということ」というお話は、私自身も、また庁内に説明していく際にも重要なポイントであると感じた。
- ロジックモデルを精緻に作成し、KPI から幸福度向上がつながるように整理することをある種のゴールと考えていたが、作業量の多さなど現実的でなく、むしろ業務量を極力増やさずできるところから取り組むべきものという考え方も持つようになった。

③ 今後ウェルビーイングに関して取り組んでみたいこと

- ウェルビーイングを最終のゴールとして、政策、施策、KPI をつなげるロジックモデルの構築を行いたい。
- 国のデジタル田園都市国家構想で採用している地域幸福度（Well-Being）指標を活用したい。
- これまでの事業立案では、説明のしやすさから客観に重きを置き過ぎてきたような気がした。今後、富山県のように主観にも着目したモデル事業を考えてみたい。
- 庁内各部署で幸福度の向上をより意識した取り組みをどのようにサポートできるのか、また県民の方により実感を持って伝えていけるのかをよりすすめていきたい。
- 県で実施する幸福度アンケートについて、分析することを前提とした設計の見直しを行いたい（現在の設問は政策立案に活用するにあたって、幸福度と関連付けて分析しやすいものにはできていないと考えられるため）。
- こども家庭庁の創設に伴い、こどもまんなかの考え方を県の総合戦略に掲げる事業へ反映することとして検討を進めており、その中でもウェルビーイングという視点があっても良いのではないかと感じた。
- 本県では、主観的な幸福度が低いことから転出超過が進んでいると推測していたが、幸福度と人口移動（社会増減）の関係性について、調査してみたいと思った。また、すでに幸福度を指標化し政策に活かしている自治体と、まったく取り組んでいない自治体とでは、統計的に何か違いが生じているのかが気になった。
- 本県の基本構想の進行管理に「幸せ」という主観的指標を設定しているので、その分析や評価を研究したい。

④ 地方自治体ウェルビーイング政策をより意義のあるものにするためにはどうしたら良いと思うか

- 中長期的な成果とデータの蓄積や、どの自治体でも容易に取り組める成功事例（政策分野）の確立が必要である。
- これまでの施策を視点を変えて再評価・再定義するものだとの認識が浸透すれば良い。
- データの収集とフル活用、職員の意識向上が必要である。
- 改めて地方自治体のウェルビーイングをどう定義していくかが難しいと感じた。主観的ウェルビーイングについても、定量的に測ることができ、言語化することができれば、各自治体の政策にも大きく活かせるのではないかと思った。
- 県民の幸福感は何によって上がるのか、政策との連動性はあるのか、各県のさまざまなデータを基に、研究が進むと良いと思う。
- 県民の方の幸福度向上にむけ「県民の方のニーズをより精度高く把握」し、「それらを解決するための取り組みや客観的にみると達成できている取り組みを知ってもらおう」ことが重要であると感じている。
- ウェルビーイングという言葉は新しいものではなく、これまで行政が取り組んでいたことの再定義であることを踏まえると、自治体の中で日々行われている個別の政策に対する議論も、本来ウェルビーイングと関連づけて話すべきものが多くあると考える。職員にウェルビーイングの考え方を浸透させることで、ウェルビーイングとひも付く政策の議論が活発になることが重要と考える。
- 指標だけで政策を評価するというよりは、指標は目安として継続的にデータを蓄積させつつ、個別の施策の目標値（KPI等）とどのように分析を行うのかという点を深化させていけたらと思う。
- さらなる機運醸成に向け県民の皆様方にウェルビーイングを知っていただく、考えていただく機会が必要と感じた。
- 専門的な学識を持つ方だけでなく、同じ悩みを持つ他自治体や県民の方とも積極的に意見交換を行なっていく必要がある。
- 自治体同士の横のつながりを強めていく必要があると思う。切磋琢磨しつつ、互いに学んでいける関係性を構築していきたい。
- ウェルビーイングに関する具体的な施策が、住民一人ひとりにきちんと届くよう、きめ細かに実行されること、そして、そのことが住民にきちんと認識されるよう発信すること
※自治体の施策には、空気のように存在感を消す方が望ましい種類のものもありますが、今回のイベントに参加して、ウェルビーイングの取り組みは、認識されること自体が肝要だと思う。